

## 韓国・丹陽の国際シンポジウムに参加して(二)

木村 英明

二日間にわたる研究報告が終了し、特に冒頭の基調報告五件について質疑応答、討論が行われた。東アジアにおけるアシユール伝統の存否論争や中国におけるルヴァアロワ伝統の有無・広がりなどの課題など、最新の研究と直接・間接に関連する重要な話題を含んでおり、その主なやりとりを簡単に紹介したい。なお、後に公表された『第二回 SUYANGGAE and HER NEIGHBOURS』と筆者のメモを参考にした。

### 国際学会議総合討論

鄭永和（嶺南大学文化人類学科教授）　これから総合討論を始めます。本日は中国、日本、ロシアの研究者が参加されていますが、それぞれに通訳の方がついていきますので、恐縮ですが、韓国語でこの討論を進めさせていただきます。

韓国・丹陽の国際シンポジウムに参加して

残念ながら、予稿集に発表要旨をお寄せいただいた一四人全員の出席はかありませんでしたが、参加いただいた皆様には、積極的な質問、またはご意見を聞かせていただければ幸いです。

では、裴基同教授の発表「Stone industry and formation process of the Kumhari palaeolithic site, Paju, Central Korea」に関する討論から始めます。一九八九年から一九九二年にわたって四回のクムパリKumhari遺跡の発掘調査が行われ、発表は、その概要報告ですが、石器の組成や堆積層の形成要因、また住居址のようにみえる凹地からたくさんの石器が発見されたことなどについて言及されています。全谷里（チョンゴクリ）遺跡とほぼ同じような特徴、傾向が指摘されました。このクムパリ遺跡に対する地質学的な見解を李東瑛博士に聞かせてもらいたいです。

李東瑛 (Lee, Tong-yong) 裴基同教授は、長年にわたって発掘調査された全谷里遺跡とクムパリ遺跡の depression された構造について、二つの可能性を提示しています。その第一は木の根による可能性、第二は水による沈下とみなしています。これに関して、まず全谷里遺跡とクムパリ遺跡の地層の形成の要因を明らかにしておかなくてはなりません。成因的な解釈で、裴基同教授は、河川から流された堆積層だと語っていますが、そうだとするとどうやってその堆積層中に石器などの遺物が含まれているのか、例えば、石器など遺物が河川堆積物と一緒に流されてきたのか、あるいは堆積層が形成された後に石器など遺物が包含されたのか、という説明がまずもってされるべきではないかと思えます。

鄭永和 要するに、「地層がどういうふう形成されたのか」という分析がされない限り、遺物に対する理解もできないうことです。

裴基同 非常に重要な点をご指摘いただきました。それは、年代問題でもあります。当初から全谷里堆積層の形成過程については様々な論議がありました。かつては、堆積層そのものが、massiveであるため風成堆積ではないか、川による河成堆積ではないか、などの説がありました。最近では韓国西部の大地から吹く風による風成堆積であるという見解が示されています。このような意見の相違は、層中に堆積構造がないことに原因があります。下層には砂層がありますが、上層部にははっきりとした層がなくてmassiveな一〜五層程度の粘土堆積物しかみられません。そこで地形学者は、「それが水による物ではない限り、なぜ堆積構造をもっていないか」と主張します。

私は、それが氾濫原堆積であると考えます。ところで、なぜ堆積構造がみられないかは河川堆積の概念自体をもっと細分化して見る必要があります。すなわち、河の流れが激しいところでは堆積構造を持ち、穏やかな地域では堆積構造が次第になくなる傾向があります。貯水池などにいって見ると良くわかりますが、貯水池にたまる堆積層の二〇〜五〇<sup>センチ</sup>には全然堆積構造がないのです。仮にそのようなことが繰り返されたら堆積構造なしにmassiveな堆積構造を持つに至ると考えられます。その実例として、南川ダムがあげられます。川の流れが弱い所でmassiveな構造が見られるのです。

それでは、なぜそこで石器が発掘されるか。それら旧石器の遺跡は、およそ川と関係ある所で発見されており、水による再堆積のケースと人間の手になるケースとが考えられます。

李東瑛 クムパリ遺跡の周辺は、玄武岩が基盤岩となつていますが、玄武岩は非常に透水性が高い。そのような地質学的な要因から考えると、裴基同教授の「氾濫原堆積」論は不適當ではないかと思いますが。

裴基同 玄武岩のことはそのとおりですが、川による継続的な流れがあると土砂は堆積されます。

李東瑛 ここでは土壤の発達について指摘しておかなくてはなりません。全谷里とクムパリ遺跡が貯水池のような過程を経て堆積したとすると土壤は生成・発達しません。しかし、遺跡で見られる赤色、または褐色の土壤は、一種の土壤の発達を示しています。貯水池のような場所で、土壤発達が起ころうということはまずあり得ない。さらには、玄武岩地帯での氾濫原堆積とすると、相当な偶然を重ねなくてはならないと思います。

裴基同 堆積後、時間を経て、土壤化されるのでは……

李東瑛 例えば、洪水の後の河川敷は赤土で大変ですよ。決して、灰色の粘土ではありません。堆積層において灰色から赤色への土壤発達は、これまで報告されたことはありません。

裴基同 短期間においては有機物などによって灰色に見えることもありますが、結局時間が経てば、他の鉱物の影響で土壤化すると考えられます。他地域の赤色、または褐色の土壤の場合も同じであると思います。

李東瑛 土壤発達というのは粘土化していくことを指します。川で堆積されるのは全部S<sub>1</sub>O<sub>2</sub>です。砂の微粒子と違っていいです。長石など風化されやすい物は川によって流され、結果として長石を豊富に包含する土壤、すなわち粘土化されにくい土壤が堆積します。もし、それが河成堆積と過程しても長石などの風化されやすい粘土はどこから流れてきたということになりますか。

裴基同 川による堆積をそのように解釈するのにも問題があると思いますが。

李東瑛 それでは一体、遺跡にみられる赤色、または褐色の土壤についてどう説明するのですか。そのような色の差はなぜ生じたものですか。

裴基同 色については、土壤の中の鉱物の影響ではありませんかね。

李東瑛 河成堆積層に見られる鉱物は、ほとんどが $\text{SiO}_2$ です。川に流されたために、 $\text{SiO}_2$ は風化されにくいのです。ですから、赤色、または褐色を帯び難いです。そして、堆積構造のことですが、実際には川からの距離によって堆積構造のない場合もあります。川の中心部から離れると堆積構造がないところがあるわけです。ですから、一番重要な問題は土壌の色のことになります。

裴基同 李東瑛先生は、どうして土砂が全部 $\text{SiO}_2$ であると思われませんか。

李東瑛 河成堆積物は大部分 $\text{SiO}_2$ です。なぜならば、長石などはそのサイズが非常に小さくて流されてしまい、堆積されません。積もるものは $\text{SiO}_2$ しかありません。それに、これまで発見された土器の成分をみると大部分 $\text{SiO}_2$ です。また、山や丘陵地で発見される土器の場合は長石の成分が多く含まれています。このような事実は、河川で堆積される物質の90%以上が $\text{SiO}_2$ であることを証明しています。

鄭永和 私たちにとって全谷里遺跡はとても重要な遺跡であり、これから明らかにせねばならない問題もたくさん残っています。今日ここでそのすべての結論を下すのは無理ですのでこれからもしっかり研究を続けたいと思います。

全谷里遺跡の土壌の色について私見を述べさせていただきますと、堆積の原因がどうであろうと、土壌が堆積し一定の時間を経ると、当時の気候環境によって変化が起こります。例えば、熱帯地帯のラテライト(?)のような土壌をみると、環境や気候が土壌の色を変化させていることがわかります。

裴基同 土壌の色について、もうひと言……。赤色の粘土層は、すべて四面法崩積層です。

李東瑛 それは違うでしょう。一般にそれは、ある堆積層の上に積もってできるものですが、全谷里遺跡とクムパリ遺跡の場合、上から下まで堆積層の成因は同じです。

鄭永和 すみません。この問題に関しては、徹夜で話しても終わりそうにありませんので、黄慰文博士の報告、「Excavation at Panxian Dadong, a cave site of south China」に関する討論に移らせていただきます。

ここでは、中国の多くの遺跡のうち、黄慰文博士自身が発掘されている盤県大洞Panxian Dadongを中心に言及されました。多くの動物化石や人の歯二点、そして石器類が発掘され、その中にルヴァロワ技法(?)で作られた石器が含まれているという報告は、とりわけ興味深い点です。近年、ルヴァロワ技法にかかわる理解が、アジアの旧石器文化研究における大きな争点のひとつとなっていますが、そのルヴァロワ技法の研究にたいへん重要な情報を提供する遺跡と言えるかもしれません。主に、この点について活発なご意見を聞かせていただきます。

韓昌均 周知のごとく、北部中国で、まだルヴァロワ技法の石器が発掘されたことがありません。たとえ南部中国ではありますが、今回ルヴァロワ技法の技術的な発展段階を見せてくれる遺跡が発掘されたことはたいへんなことです。おめでとうございます。

ところで、発表要旨の三三三ページ図三に掲載されている資料にはLevallois-like Pointと記載されていますが、私はLevallois pointと呼んでも問題ないと思います。F・ボルドのタイプリストにある剥片尖頭器に該当すると考えられます。また、図四のcore tabletについても、同じルヴァロワ技法によるものとみなして良いのではないでしようか。

黄慰文 韓昌均先生が指摘されました点は、石器研究者の中でもとても敏感な問題で、遺物の分類に関してI V P P (中国科学院古人類与古脊椎動物研究所)の中でも様々な論争があります。私がlike-pointと呼ぶのにはわけがあります。第一は、類例が少ないこと、第二に典型的な特徴がみられないことが挙げられます。

鄭永和 like-pointと呼ぶ理由について十分な説明をいただきましたが、次に、フランスで旧石器関係の研究をされてきました洪美英先生にマイクをお渡しします。

洪美英 この挿図をみると、ルヴァロワ技法の中でも中軸剝離を利用したようですね。私が今回報告したボン・ボム遺跡などでは、ルヴァロワ技法は、当初は中軸剝離ですが、次第にそれが片側剝離・両側剝離を経て、やがて石刃剝離へと変化を見せます。この中心点方向剝離技法がボン・ボム遺跡の遺物と一致しているようです。

ボン・ボムの場合は、選択された石を最大限に利用するため中心点方向剝離技法が使われたと考えられますが、この遺跡の場合はいかがでしょうか。

黄慰文 ここでは、石器の材料としてチャートと石灰岩が使われていますが、周辺地域にチャートの産地がないためか全体に占める比率は極めて低い。しかも、ルヴァロワ技法で作られたものは非常に少ないのです。これらのようなことから、技術的な方法が材料を節約するためとは考えていません。

鄭永和 洪美英先生はフランスで前期・中期旧石器を研究しており、ボン・ボム遺跡を長年調査してルヴァロワ技法の遺跡をたくさん見ていられます。ですから、パンシーアン洞穴の石器がボン・ボム遺跡のそれと相当類似していること、石器を加工するときの経済性などについても質問いただきました。その確認については、なお遺物の数が極めて少ないということでした。

さて、人間の歯および動物化石に対しては朴善周教授にひと言お願いしたいのですが。

朴善周（忠北大学考古美術史学科教授） まず、発掘された歯二点を初期 *Homo sapiens* のものだとしていますが、それについてはどういう根拠がありますか。また、動物化石を *Ailuropoda-Segodon fauna* だと規定していますが、

それは中期更新世を代表するんですか。

黄慰文 難しい質問ですね。歯2点については、IVPP内の学者たちの研究結果として石器人の特徴があり、しかも *sapiens* の特徴があります。私は今度の発表文ではとりあえず当初の報告書にしたがいましたが、その件に関しては現在も研究が進行しつつあります。動物化石についても、私個人としては中期更新世のものだと考えております。

鄭永和 これからの研究・調査に期待して止みません。

次に、木村英明教授が発表されました。予稿集の三七ページにあたります。およその内容を説明しますと、外国の研究者との共同研究をまじえながら、北海道の白滝幌加沢遺跡と黒曜石に関する研究が続けられています。黒曜石による石器生産と周辺地域への黒曜石の移動・伝播、石器製作の作業が標高差に対応して地域ごとに異なっている事実などを証明しています。そして、黒曜石産出地から四〇〇<sup>キ</sup>離れたサハリンで同じ黒曜石が見つかっている事実を明らかにし、当時の人々の活動範囲など、様々な側面から新しい研究が試みられています。

李憲宗 私は主に先生の報告に関わる同じような研究をしておりますが、石器製作技法や、河川流域に分布する遺跡の分析などに感銘を受けました。ニーナ・コノネンコ先生とともに、一つうかがいたいことがあります。

北海道の黒曜石がサハリンから発見されると聞きましたが、朝鮮半島においてそのような証拠はありますか。

木村英明 これまで、朝鮮半島での確かな例は知りません。現在、黒曜石に関する分析はいろいろな方法で行われていますが、ニーナ・コノネンコ先生にみせていただきましたウスチノフカ遺跡群などの黒曜石の資料を見る限り（肉眼観察）では、北海道産のものがあると確信しました。ですから、朝鮮半島にも広がる可能性は充分にあるの



ではと思います。もちろんそれに関しては、むしろ朝鮮半島と九州地方との関連性に注目しつつ研究していく必要があると思います。

鄭永和 木村先生はすばらしい論文を発表されていますが、韓国では黒曜石がそれほど発見されていないですね。黒曜石の科学的な分析について李東瑛博士にひと言お願いしたいんですが。

李東瑛 木村先生によると、北海道のいくつかの黒曜石産地の中で白滝の黒曜石が約四〇〇<sup>キ</sup>離れた所まで伝播されているそうです。その四〇〇<sup>キ</sup>の範囲のうちで、白滝産のものと違う他の黒曜石はありますか。また、それを分類する際には、肉眼でなさっていますか、それとも科学的な方法でやっておられますか。

木村英明 黒曜石の分析に際しては、蛍光X線分析法とか、フィックション・トラック法などが用いられていますが、経験上、肉眼においてもある程度の区別はできると思います。しかし、本日示した表にあるものは、あくまでも理化学的方法によって与えられた結果を検討したものです。また、四〇〇<sup>キ</sup>というのは相当な距離であります。そこまで広がったことは間違いありません。多くは、完成品というよりも、二次的加工が加えられた半加工製品をもつて行われたと考えております。白滝産の他には、置戸産なども知られています。

鄭永和 他に、質問がありますか。

李憲宗 日頃、これは難しいなと思っているのが、細石刃の製作過程についてです。四七ページにホロカ技法というのが示されていますが、上図と下図が少し異なっていますよね。下図は、その前の過程が少し省略されていますが、東北アジアにみられる実例と類似しています。その差をどう思いますか。

木村英明 北海道から発見される細石刃核の形態はまさに多様です。しかし、それをもって編年することは難しい。

細石刃核だけで編年したり、形態的に細かく分類したりするのはそれほど意味のないことがあります。やはり、細石刃核は作業の残存物に過ぎないからです。

また湧別技法は、ホロカ技法の典型的なプロセスから考えるとそのスタイルが少し異なっているというふうに分ければいいのじゃないでしょうか。四八ページの挿図で明らかのように、一つの素材でいろいろな形態の石核が製作されているのがわかります。

鄭永和 さらに質問がありましたら、どうぞ。

李憲宗 私も木村先生の考えに同意します。細石刃核を細かく分類することに不満をもっていましたから、先ほどの先生の意見にまったく同感です。

裴基同 もう一つうかがいたいことがあります。黒曜石の交換についておっしゃいましたが、交換というのは相互補完的な関係から成り立つと思います。そうしますと、黒曜石の交換対象は何でしょうか。

木村英明 私の研究は、なお多くの要素について考慮する必要があります。またさまざまな角度から詳細に検討する必要がありますと思います。交換の問題については、今後いつそう木目細かく研究していくつもりです。交換のことについてはですが、荒屋型彫器と呼ばれる彫器があります。荒屋型彫器は、すべて頁岩でできています。白滝周辺には良好な頁岩がありません。一方、黒曜石地帯ではあっても頁岩を求める人々の動きもみられます。同じように、頁岩地帯の道南部の人々にも黒曜石を入手する動きがあったと考えられます。すなわち、両者の間で相互交流があり、材料や技術の「アンバランス」によって交換が成り立っていたとみられます。

鄭永和 木村先生、ありがとうございます。次は、ニーナ・コノネンコ先生の「Some problems of cultural con-

facts in the late Pleistocene-Early Holocene of eastern Asia」に関する討議を始めます。周知の如く、後期洪積世から沖積世にわたる期間の東北アジアはお互いに深い関係があったことが明らかになっていますが、この報告は、その問題に関するものです。最近、韓国の済州島でも重要な資料が発見されて注目を浴びていますが。

崔楨苾 (Choe Chong-Pil、世宗大学校人文科学大学学長) ニーナ・コノネンコ先生はウスチノフカ遺跡から出土した三つの石器、つまり backed-knife、elongate-scraper、tanged-point を根拠にし、ウスチノフカ遺跡の三つの石器文化が形成されるまで、日本列島や朝鮮半島からの文化の流入があったのではないかと語っています。

ウスチノフカ遺跡周辺のアムール河では大規模な旧石器遺跡が発見されています。私はウスチノフカ遺跡がサルエムザ文化圏に属しており、tanged-point などが朝鮮半島や日本を通して伝わったのではなく、独自の発達した可能性もあると考えております。なぜかという点、ウスチノフカ遺跡六の場合一一、五〇〇年前頃のものと考えられ、細石器伝統的な要素がみえ、韓国旧石器文化とは程遠いことがわかります。ここでは葉形尖頭器と石鏃が発掘されていますが、周知のように韓国の旧石器時代の遺物の中には葉形尖頭器はありません。その葉形尖頭器は、ロシアのデユクタイ文化と関係があるようです。最近、サルエムザ地域から多数の遺跡が発見され、ウスチノフカ文化との関連性が問われています。また、韓国の北部地域では tanged point が発見されていません。

ニーナ・コノネンコ先生の意見に賛成ですが、ウスチノフカ七遺跡の場合、石刃石器群の特徴を持っています。従って、ここでは細石刃文化が認められません。しかも、茂呂タイプのようなポイントがあり、スヤンゲ遺跡との比較が可能となります。そのような理解から文化の流入説を述べたわけです。ウスチノフカ六遺跡・同四遺跡は、約一二、〇〇〇年前頃と考えられており、細石刃伝統的な要素がみえます。しかしながら、ウスチノフカ遺跡群の

遺物は、ただある一つの地域だけではなく、多様な地域の文化の特徴をみせています。

鄭永和 次いで、木村先生いかがでしょうか。

木村英明 ニーナ・コノネンコさん、たくさんの資料を拝見させていただき、ありがとうございました。先ほどの黒曜石のことについてですが、北海道というより、多くが日本の九州産の黒曜石に似ているような印象を受けました。また、細石刃核の特徴も九州のものに類似していますし、その文化的関連性についてどう考えていますでしょうか。

ニーナ・コノネンコ 先生がご覧になったのは、主にマロジエージュナヤ遺跡の遺物ですが、まだ発掘したばかりなので何んともお答えできません。私見ですが、北海道からきたものではないかと考えていますので、これからの研究にぜひ木村先生の援助をいただきたいと願っています。マロジエージュナヤ遺跡の文化的性格は、ゴルバトカ遺跡に似ていますし、日本の本州のものとも類似しているように思います。

鄭永和 次は、李隆助先生の「スヤンゲ遺跡―文化複合と展望Suyanggae...Cultural Complex and Prospects」に対する議論を始めます。

崔福奎 (Choi Bok-u-Kyu, Kangwon 大学歴史学科教授) 私が知りたいのは、スヤンゲ遺跡の周辺に同じような遺跡がないかということです。もし、新たに遺跡が発見されるならば、スヤンゲ遺跡との比較もできますし、旧石器時代の文化像を理解するのに格好の資料となるに違いないと考えています。

二つの資料について絶対年代が明らかにされていますが、文化層も非常に厚いようですし、文化層を分けて研究していくべきだと思いますが。

李隆助　すぐく大事なお話ですね。まず、周りに他の遺跡があるかどうかについては、スヤンゲ遺跡が発掘されてまもなくその地域が水没したため、とても無念であります。川の底になるところだけはなんとか調査できましたが、上の台地の方は調査できずに水没してしまいました。しかし、遺跡が存在していた可能性は充分あります。

第四文化層から出た石刃石器群が、韓国から発見された一番古いものだ、と日本の松藤和人先生は推定しています。調査ができなかったのはかえがえすも残念です。

鄭永和　次は崔楨苾先生にお願いいたします。

崔楨苾　これからの研究方向についてです。スヤンゲ遺跡は開地遺跡ですが、スヤンゲ遺跡は、季節的なキャンプ地であるのか、住居址を有する集落なのでしょう。もし、季節的なものであるとしたら、どのような季節に利用されたのかを研究すべきと思いますが。

南米の原住民たちは、季節によって小集団になったり、大集団になったりしますが、このようなことも研究していかなくてはいいけませんね。

旧石器時代の研究者の大半が、石器の作り方やその分類に興味をもっています。ところで、大きな両面加工の石器を「ハンドアックス」として、スヤンゲ遺跡の年代をととも古く考えていますが、両面加工の石器は本当に「ハンドアックス」なのでしょう。異論が多いようですが。

李隆助　スヤンゲ遺跡の本格的な研究は、一九八九年から始まりました。先ほど申し上げた通り、遺跡周辺が水没し、十分な調査ができなかった点があります。ですから、水が引いた時にでもなお調査ができたらと思っています。

二枚の文化層が確認されているが、礫層の少し上の粘土層のIVb層において発掘された住居址の炭を分析した結

果、成長不良な松の木であることがわかり、秋頃に利用された住居址だと推測されます。また、石器製作址が五〇カ所ほど発見されていますが、集団の問題については、さらに詳細な研究が必要です。なお、剝片尖頭器は小型の動物の捕獲に用いられたものとみられます。

最初の質問ですが、今回をもって私のこれまでの見解を訂正させていただきます。国内外のたくさんの方の資料を観察してきた結果、ハンドアックスではなく、細石刃核のブランクとするのが妥当と考えます。

鄭永和 スヤンゲ遺跡からは大量の遺物が出土していますし、司会をさせて頂く立場ですが、私も、今後いつその研究が必要と思います。

これをもって、討論会を終わらせていただきます。

以上が、討論の概要である。

### 遺跡および施設の見学

ところで、丹陽での国際シンポジウムを終えた後、忠北大学での再度の国際シンポジウムを間に夾みエクスカーションが実施された。そのスケジュールは次のとおりである。

九月二四日 丹陽に所在するクナシクル洞穴、クムグル洞穴、スヤンゲ郷土資料館、スヤンゲ遺跡を巡見。

九月二五日 バスにて丹陽を出発。清風文化財団地（野外博物館）、錦陵遺跡、国立清州博物館を巡見し、忠州市にて宿泊

九月二六日 国立忠北大学を訪問。李琅鎬総長を表敬訪問、忠北大学博物館見学の後、忠北大学での国際シンポジ

ウムに参加。黄慰文、筆者、ヴォルコフ、李隆助による基調講演の後、質疑応答が行われた。筆者は、「北アジアにおける細石刃文化の起源」について講演を行った。ここでのシンポジウムの紹介は、省略する。

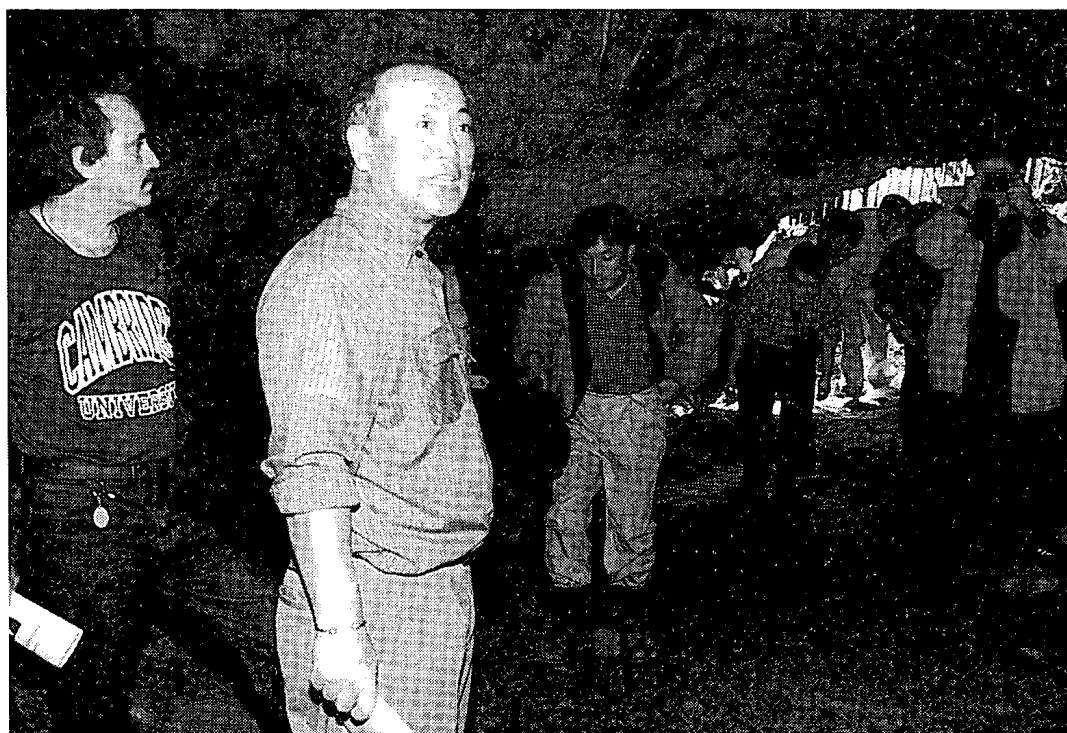
九月二七日 国立扶余博物館、国立公州博物館、石荘里遺跡を見学。ソウル市にて宿泊。

九月二八日 全谷里遺跡、国立中央博物館を見学。

韓国の北部、そして中部における遺跡や博物館の巡見であるが、韓国での旧石器研究において欠かすことのできない重要な遺跡が含まれており、われわれ招待者への李隆助忠北大学教授らの暖かい心遣いがよく示されている。以下に、そこで得た知見などをまじえながらそれら遺跡や施設の概要について紹介したい。

#### クナングル洞穴 (Kunangkul cave 九娘窟)

すでに触れたように、国際シンポジウムの開かれた丹陽、あるいは問題の垂揚介遺跡は、石灰岩の山塊を刻む峡谷にへばりつくように作られたいくらか広い河岸段丘上にあるが、当然ながら周辺には大小数多くの洞穴の存在が知られている。石灰岩地域は、自然にできた洞穴が存在し、旧石器時代の人類がその洞穴を利用した例が少なくないことから、旧石器研究にたずさわる者が熱い視線を寄せる地域のひとつである。しかも、文化層の重層と、骨など有機質遺物の遺存が期待できることから、層位的・編年的研究はもちろん、当時の古環境や彼らの行動様式を究明するうえで欠かすことのできない調査地であると言えよう。事実、この地域でのこれまでの調査によって、旧石



クナクル洞穴の内部

器時代の人類がかつて利用したと思われる遺跡がいくつか明らかになされている。

クナクル洞穴は、今後の調査がもつとも期待される有力なひとつである。ホテルの前を山側に折れ、北東へ田園地帯を抜けていくと、石灰岩の採掘地へとでる。その一角に、遺跡へと続く山道の登り口がある。斜度一五〜二〇度ほどの山道を三〇分ほど歩き、さらに急峻な壁面を登り詰めたところに遺跡の案内板と鉄柵に保護された洞穴があらわれる。山歩きに慣れた人にとってもかなりの苦勞を伴うものであるに違いない道のであるが、この道を通って行われた発掘調査時の苦勞が偲ばれる。途中の斜面に、しばしばフィッシャーが口を開けており、下草やアカシアなどの木々に覆われている。山全体が石灰岩であることが理解された。同時に、大規模な洞穴遺跡群の存在が推定された。

洞穴は、Maepo 高校の教師 Im Kwang Hoon 氏によって発見され、一九八六年と一九八八年に忠北大学博物館によって四二平方メートルが調査された。人類化石、サル、ニホンジカ、トラ

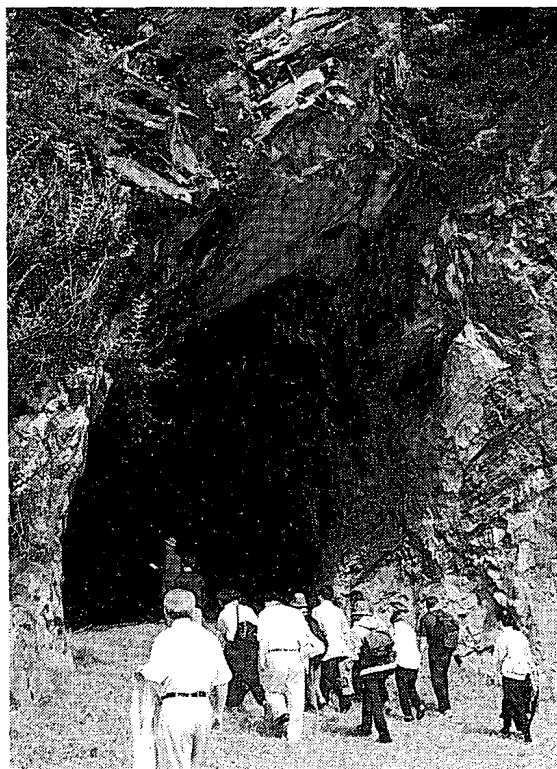


などを含む動物化石、石器、骨器が発見されたという。しかし、これまでに調査された区域はごく一部で、しかも確かな年代を示す資料も少なく、将来に多くの課題が残されている。

崩落した岩石のためか、洞穴入り口部が狭くなっており、這うようにして洞穴内部に入り込む。内部で天井がやや高まり、奥に向かって広がりを増す。目測によると、高い所で三〜四メートル、場所によっては人が立つのも難しい一メートル以下の高さとなる。奥行きは一〇数メートルまでを数え、現状で見える限り、決して大規模とは言えないが、奥へさらに続くように思われる。足元には剝落、あるいは溶け出した石灰がその後再堆積してできた板状の石灰岩層と、おびただしい量のシカなどの骨片を含む褐色土層が互層を成して厚く積もっている様子が、試掘溝の一部壁面に観察された。洞穴内堆積物がかなりの厚さを持ち、重層する文化層が存在することはほぼ疑いなく、今後の調査の進展が大いに期待される。これまでに発掘された資料は、忠北大学博物館でみる事ができる。

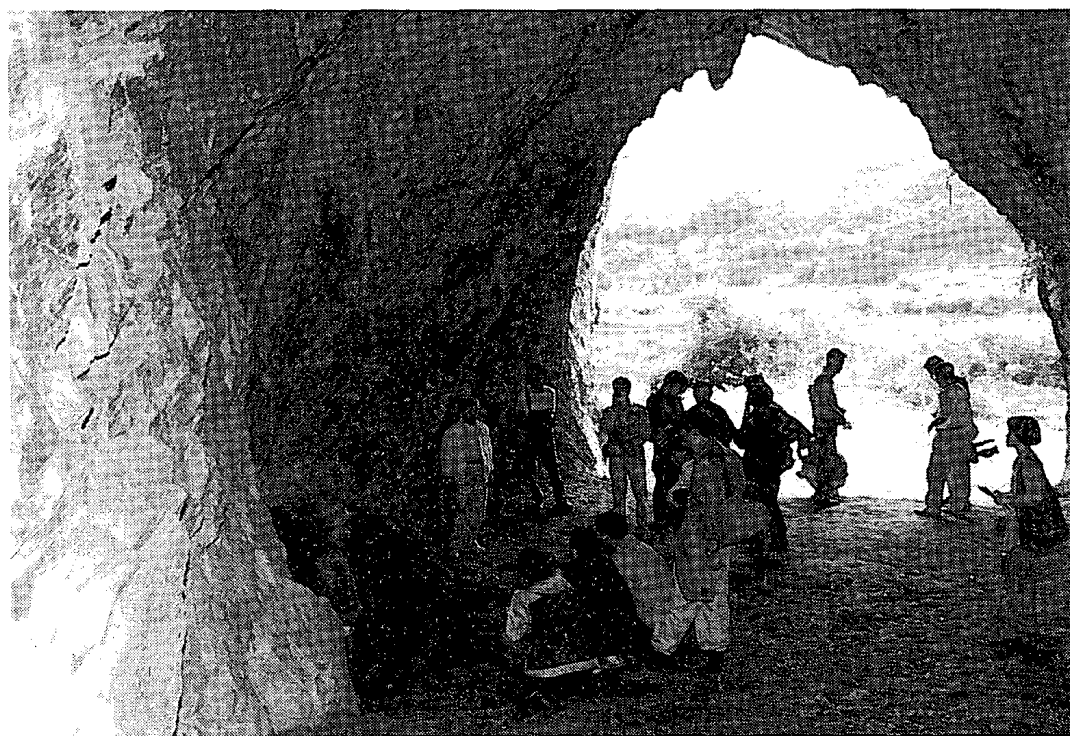
#### クムグル洞穴 (Kumgul cave 金窟)

丹陽の市街地から北へ三キロほどの南漢江の岸边に位置している。嶋譚三峰 (Todam-Sambong) が、この地域の景勝地のひとつであることはすでに紹介したが、二〇人ほどが乗れる小型船で、その三峰と呼ばれる水面に浮かぶ奇岩とその上に建つ赤い楼閣を右手に眺めながら対岸に渡る。南漢江によって形成された広々とした氾濫原が広がり、そこにはトウガラシやエゴマなどの作物が植えられている。特に赤いアワの穂が珍しく、また懐かしい。けたたましく鳴き声を発するカササギや、アカシアやミズナラの大木の間に残された古めかしい祠を観察しながら歩くことおよそ二キロ、河へ向かって走る一本の沢があり、その沢のへりに大きな口を開けたクムグル洞穴が位置してい



クムグル洞穴（開口部）

る。標高一三五呎、入り口部で高さおよそ六、五呎、幅およそ四、五呎を測り、奥行きは一二呎ほどと思われる。洞穴は、すでに一八九五年に発見されていたらしいが、一九八三年と一九八四年に発掘調査が実施され、正式に旧石器時代に利用された洞穴遺跡であることが判明した。洞穴内に八枚の文化層が調べられ、かなりの長期にわたって利用されたと理解されている。下から、アシュール期相当のクリーヴァーや剥片などが発見され、その上位にルヴァロワ剥片、石刃などを伴

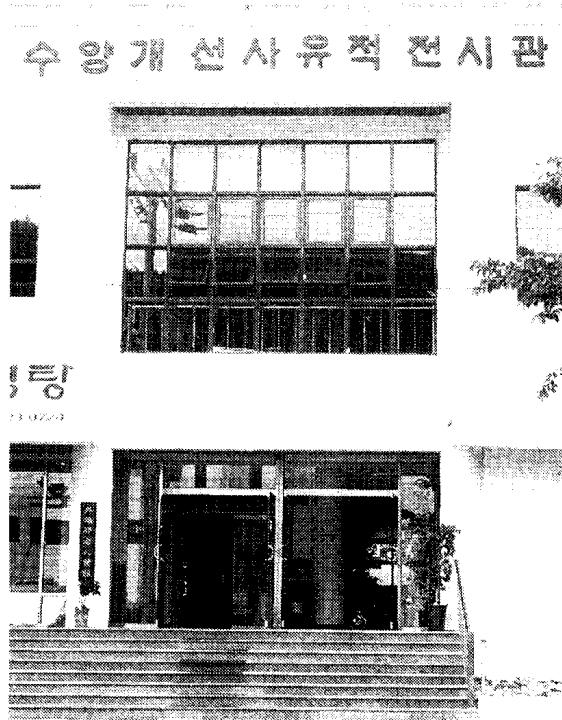


クムグル洞穴（内部）

韓国・丹陽の国際シンポジウムに参加して



石器を作る垂揚介人（復元）



垂揚介先史遺跡展示館

う石器群が確認されたという。また動物化石からは、概して温暖な気候がうかがえるという。資料は忠北大学博物館と国立清州博物館でみることができる。

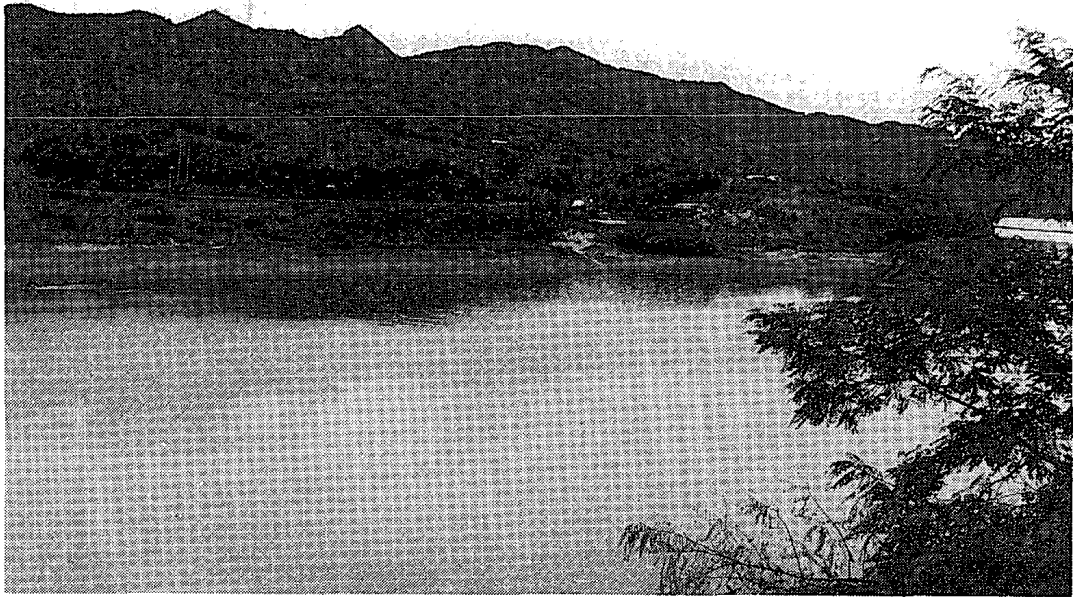
#### 垂揚介先史遺跡展示館

丹陽市内、河遊びやハンググライダーを楽しめる行楽地の一角に、三階建てのこじんまりとした垂揚介先史遺跡展示館がある。建物を前にして、入り口部の左手に、石器を製作するスヤンゲ人の像が復元され置かれている。そして、館内には、剥片尖頭器や「ハンドアックス」、細石刃核、細石刃、搔器などスヤンゲ遺跡から出土した資料などが展示されている。これら遺物の展示とともに、彼らの様々な生活の様子がジオラマを使いながら紹介されている。入り口のスヤンゲ人の復元と並んで、研究者以外の多くの一般の人々の関心や興味に応えようとする配慮がうかがえた。

## 垂揚介遺跡

すでに触れたとおり、垂揚介遺跡は、日本やロシア極東の石器と類似する石器がまとまって出土したことから、韓国の遺跡の中では日本でもっともよく知られた遺跡の一つである。忠州ダム建設にともなう南漢江上流域の考古学的調査の一貫として、一九八三年から一九八五年にわたって発掘調査が実施された。調査後、貯水のために一四〇ほど水位が上昇し、かつての旧丹陽市街地や付近に立地していた遺跡の大半は水面下に没し、ほんの一部が残るのみである。また、遺跡の後背地にあたるもう一段上の段丘面、すなわち現在鉄塔が立つ面にも石器が表採されており、遺跡群がいくつかの段丘面にまたがって存在し、大規模な遺跡群を形成していたことが窺われる。なお、遺跡で主体をなす石材の頁岩は、南へ一、五<sup>キ</sup>ほどの至近の距離で入手できるという。

動物化石や古い石器群などを包含する洞穴遺跡と、多様な細石刃核や剝片尖頭器などを内容とした拠点的な開地性遺跡とが共存する韓半島中央部の遺跡コンプレックスが、半島全体、ひいては極東全体の中でどのように位置づけられるのか、極めて興味ある問題である。ちなみに時代は異なるが、われわれを案内してくれた韓国の植物育種の権威、ソウル大学名誉教授の許文會先生の話が示唆的である。朝鮮半島の東海岸では塩を生産できないが、西海岸では塩がとれる。そこで古い時代から、西海岸の塩を東海岸特産のメンタイと交換するルートがあつて、丹陽は、南漢江をのぼってきて、東へ抜けていく常に要衝の地にあつたという。丹陽から永春↓寧越↓大関嶺↓江陵と通つて東海岸に至るといふ。もちろん、このような交換・交易ルートがどれほどの昔にまで遡るものか定かではない。しかも自然環境が大きく異なる時代のこと、直接参考にはならないが、文化を東西に運ぶルートとして今後注目する必要がある。特に、遺跡の立地に南漢江という河と石灰岩や石器の原材が大きな関わりをもつたことは考え



垂揚介遺跡（対岸の中央やや左）



垂揚介遺跡群（手前、小川を挟んで対岸）

てよいであろうし、貴重なエピソードである。発掘調査と遺物については、一部重複するのでここでは省略する。

### 清風（チヨンブン）文化財団地

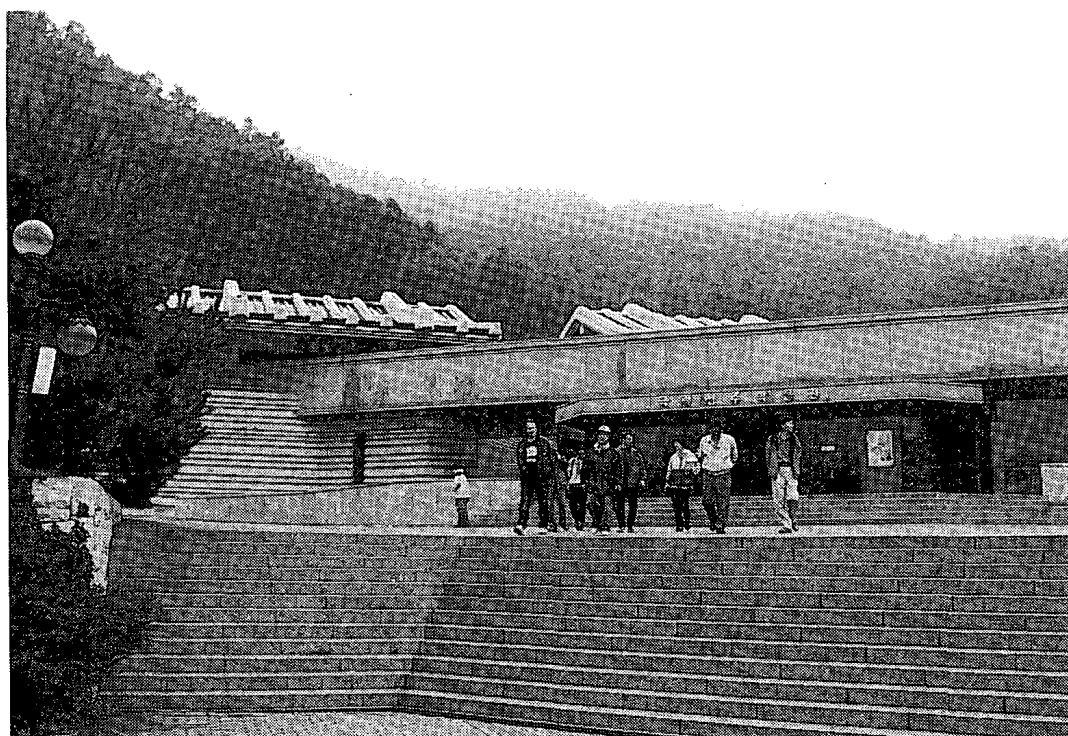
南漢江の深い緑と松が白い岩肌を飾る岩山を眺めながらバスは、道をのぼり始める。丹陽の街から西へ二四キほど、チュンプー湖を見おろす丘に清風文化財団地がある。忠州ダム建設で水没する地域の文化財を移築、復元して、一九八五年に開設された野外博物館である。一〇世紀頃から現代までの民家、寺、学校、官衛の建物、墓に置かれる石像や、石仏などをみることが出来る。民家の門にはかつて住んでいた家族の表札がそのまま掛けられている。古来伝統的な農家のたたずまいをそのまま残す、奈良の東大寺付近の古い築地塀を思い出させる低い土壁を巡らせた門をくぐると、いくつかの建物、特に母屋と貯蔵用の建物がセットとなって中庭をめぐるように位置してある。裏庭の一角には、嫁入り道具一式、すなわち大小様々な瓶と煎じ薬に使う土瓶、各種の陶製容器がまとめて置かれている。建物の壁には農具や、籠などが掛けられ、部屋の一室には機織りが置かれている。民家も、行政官の別荘として使われたという建物も共通して、カーヴを描く瓦をのせた屋根、どっしりした柱、そして竈・オンドル用に工夫された土壁で塞がれる床下などに特徴がある。別荘の例では、一角が小部屋のようになっていて、焚き口と燃料置き場の役割が与えられている。かつての日本の寺や民家にみられた開放的な床下構造とは対照的であり、冬の気候の厳しさをしのばせるものである。



清風文化財団地



清風文化財団地



国立清州博物館

錦陵洞（クムリヨンドン）遺跡

錦陵洞遺跡は、最近新たに発見された遺跡で、清州市北々西の郊外、新興のアパート群が立ち並ぶ付近に位置し、比高一〇～二〇ほどの小高い段丘上に立地する。現在、トウガラシ畑として利用されているが、剝片や礫片などがわずかに採集できる程度である。李教授の説明によると、ハンドアックス（握斧）などが採集されているということであるが、性格・時代などはなお不明である。

国立清州博物館

丹陽を出発してから午後になって、忠清北道の中心都市清州にある装いも真新しい国立清州博物館に辿り着く。深い緑の山並みにすっぽりと包まれるように、充分な広さをとった階段とアプローチ、そしてその向こうに、白っぽいレンガ屋根を幾重にも重ねる低いがどっしりとした博物館が位置している。夏の終わり、緑は黒ずみ、しかも久しぶりのこぬか雨にあたりがけぶり、重厚さをいっそう増していた。館内では、

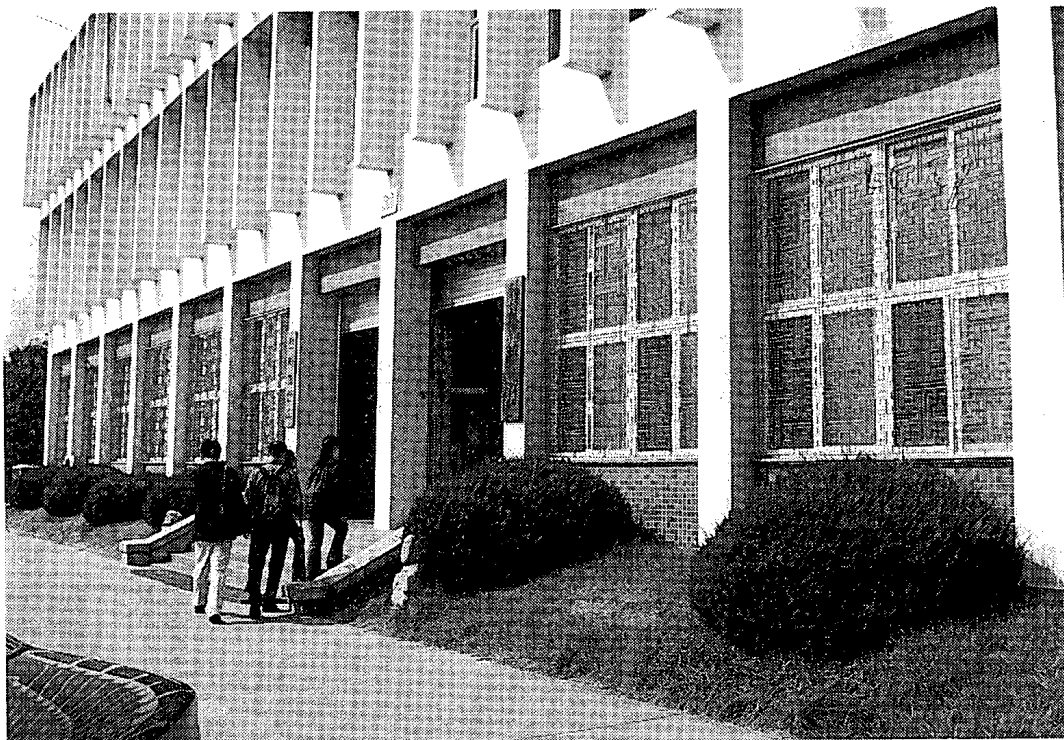


先史時代から現代までの資料をみることができ、特に、活版印刷発祥の国らしくそれに関連する資料がみられる。文書記録にでてくる印刷所が発掘によって確認されたというものであり、大きなしびや仏像とともに興味深い。なお、新石器時代の紀元前二、〇〇〇〜一、〇〇〇年に位置づけられた清原雙清里遺跡Ssangchong-riの展示資料中に、「アムール編み目文」をもつ土器片が存在することを知った。「アムール編み目文」土器は、沿海州南部からアムール下流域にかけて分布の中心があるもので、しばしば石刃鏃と伴出することが知られている。ここでの資料によって、従来考えていた広がりだけでなくさらに南の朝鮮半島中部にまで及ぶことが明らかになった。北海道や極東での石刃鏃文化とのかかわりについても、興味がそそられる。

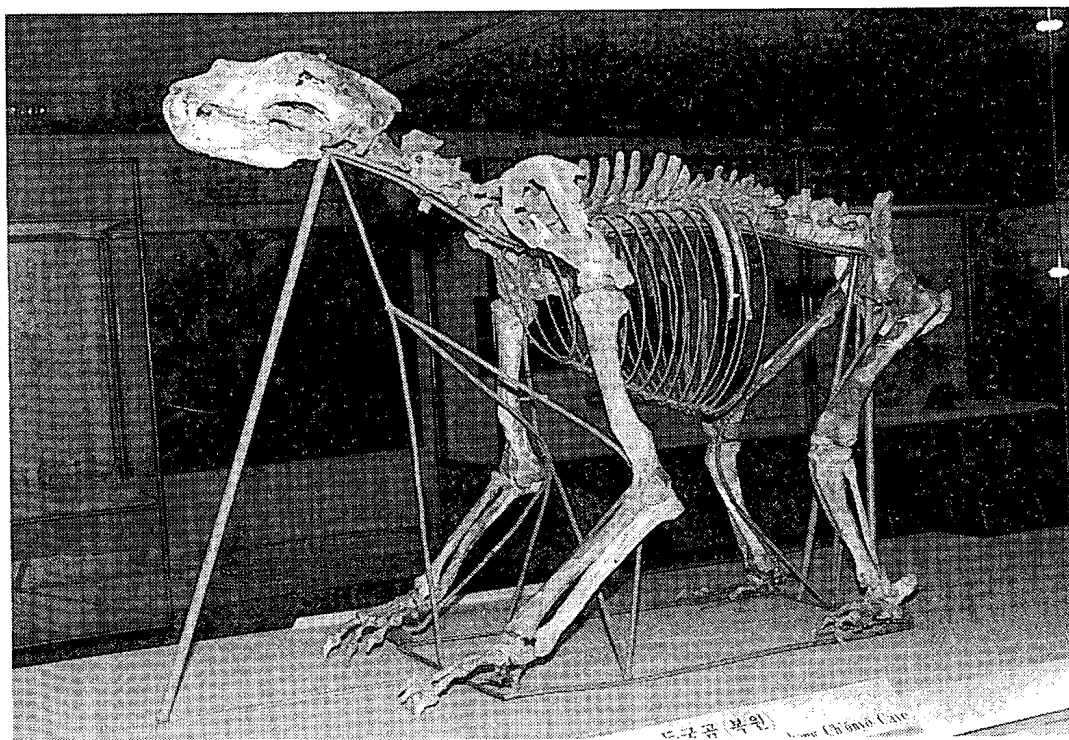
#### 国立忠北大学付属博物館

李隆助忠北大学教授らを中心とした長年に及ぶ考古学的調査の成果が、三階建ての建物の中にある大学付属博物館に収められている。垂揚介入遺跡、クムグル洞穴、クナンクル洞穴など旧石器時代関連の資料をはじめ、新石器時代の貝塚や青銅器時代の遺跡から出土した大量の資料、その他歴史・民族資料など多数が展示されている。なかでも、剥片尖頭器や細石刃核、細石刃ブランク（ハンドアックス）、細石刃、打製石斧、局部磨製石斧など垂揚介入遺跡の発掘品が主体をなしており、典型的な資料をガラス越しに観察することができる。また、教授らが主に石灰岩地帯をフィールドとしてきたことと関係し、ヒグマなどの動物化石の復元資料や、線条痕跡や切断痕、加工痕、使用痕を残す骨角器や獣骨製遺物・骨器が豊富に展示されているのも、興味深い。

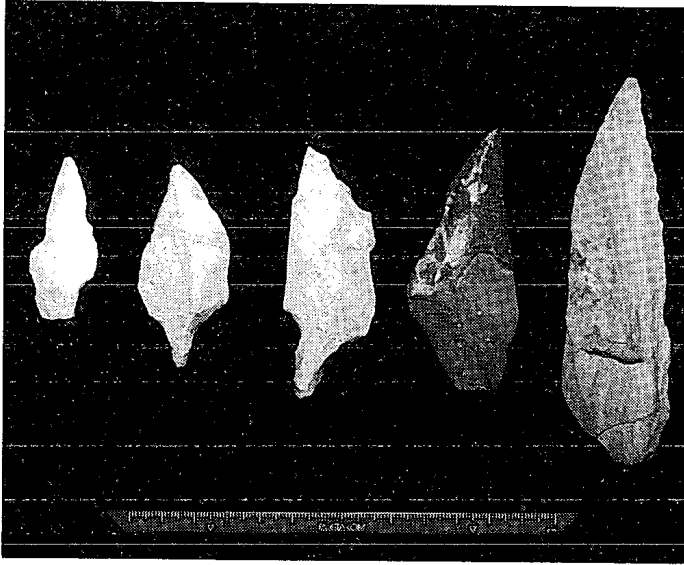
展示室とともに、広い館長室や事務室、研究室をも兼ねたようなコンピューターを複数備えたデータ室など、大



国立忠北大学付属博物館

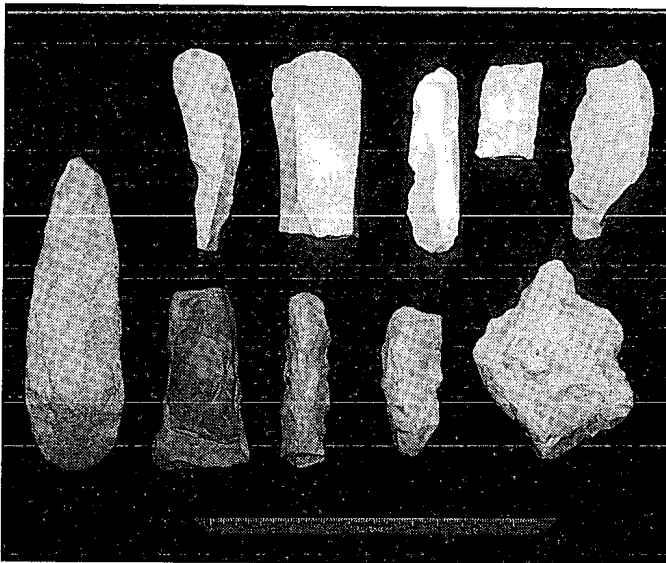
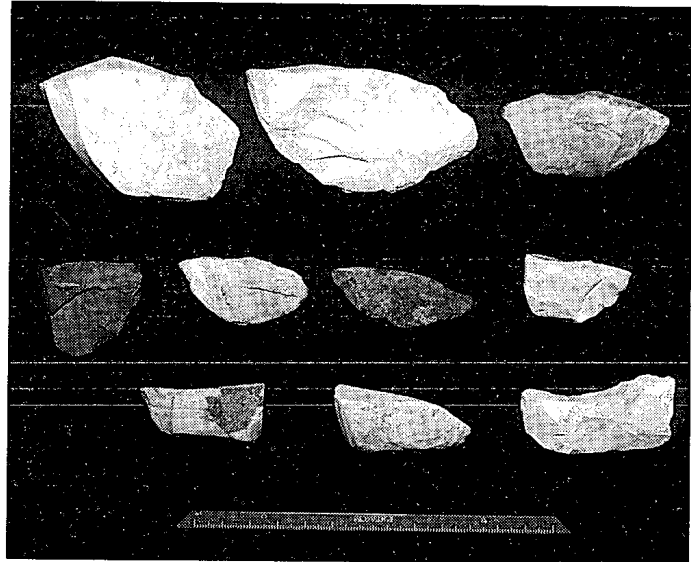


トゥルボン・チオンヨー洞穴出土のヒグマ（化石）



垂揚介遺跡出土の剝片尖頭器

垂揚介遺跡出土の細石刃核



垂揚介遺跡出土の局部磨製石斧・石刃・「角錐形」石器など

学付属博物館としては比較的恵まれた環境が整いつつあるように見受けられた。展示室の入り口右手の小部屋は受付らしく、その日に発刊されたばかりらしいニュースレター（小冊子）が山積みになっていた。どの部屋でも、若い学生らが机に向かつてそれぞれの作業に取り組む姿があり、展示室のあちこちには二、三人ずつがグループをなしてノート片手に熱心にメモをとりながら観察する姿がみられる。博物館が学生らによって大いに活用されている様子が窺われた。

#### 国立扶余博物館

丹陽から忠州（チュンジュ）へは、山から平野部へと移動するのにあわせて、コウリヤンや唐辛子、エゴマなど様々な穀物や野菜を細かく組み合わせた山間部の農地は、やがて広々とした水田の広がる光景へと移り変わる。その間、都市化の動きがかなりの内陸に及んでおり、変動する韓国社会の一面を垣間見ることができた。忠州から公州（コンジュ）への道は、さらにおだやかな景色へと変わり、先入観のせいか、あるいは戦後回復しつつあるという山の樹々のせいか、畿内の古都にでも迷い込んだかのような錯覚にとらわれる。扶余博物館はその公州にあり、やはり広々とした敷地にどっしりした白亜の殿堂が目に入る。

百濟時代の瓦当や土器、各種装身具など先史時代の遺物数千点が、先史、歴史、仏教美術などの各部屋に分けられ、展示されている。禮山・東西里遺跡出土の青銅器時代の遺物、天安・清堂洞遺跡出土の原三国時代の遺物、陵山里一号墳から発見された壁画、軍守里の石像如来座像や金銅製釈迦如来立像、花崗岩に四行五六文字が刻まれた砂宅智積碑など日本との関わりを物語る資料多数が展示され、興味をそそられる。なかでも、百濟の王陵、陵山里（ヌ

韓国・丹陽の国際シンポジウムに参加して



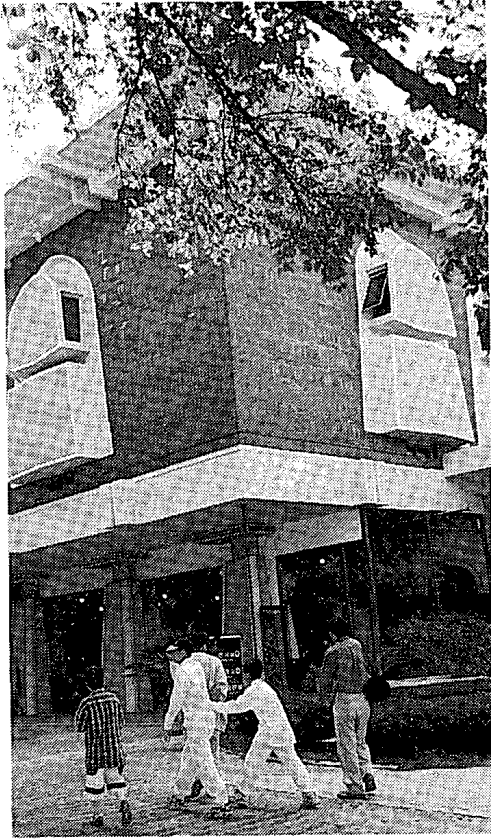
国立扶余博物館

ンサルリ）古墳群の七基のひとつから一九九三年に発見された高さ六四<sup>セ</sup>、周囲一九<sup>セ</sup>の金銅竜鳳蓬萊山香炉は、韓国美術史上の最高傑作と讃えられただけあって、繊細さと力強さを兼ね備えた、しかも気品溢れたと表現するのがもつとも似つかわしい一見に値する展示品である。息を飲むほどに迫力があり、しばし人々の目をひきつけて離さない。なお、古墳群は、扶余から論山方面に三<sup>キ</sup>ほど離れた山麓にある。門外漢ながら、次の武寧陵の出土品とあわせて、日本の古代・飛鳥文化の源流が韓半島にあることを実感させる格好の資料である。

#### 国立公州博物館

少し急な階段をのぼりつめると、黒松の大木に覆われた博物館の前庭があらわれる。それら木々の間に石仏が並ぶ。武寧王陵出土資料を展示・保管する単独の博物館である。入口を入ると、レンガ積みのあるせん室を象った部屋へと招かれる。玄室を復元した部屋は、壁から天井がアーチ状に作られ、足

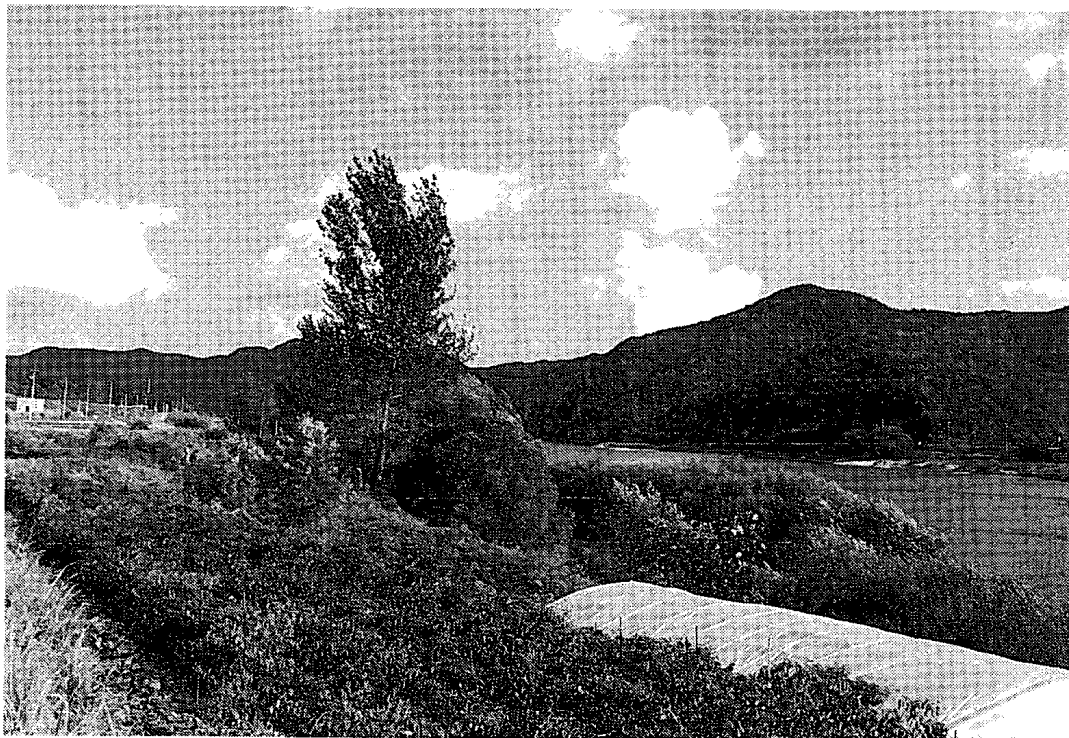
下にはアクリル板を通して棺を覗くことができるように工夫されており、王陵の構造と雰囲気を実感できる。武寧王の棺に使われた木材は、高野山から運ばれてきた松であるという。当時の韓半島と日本の間での人や物資の流れが双方向であったことを知る。また、国宝とされる金製の冠や沓、心葉形（ハート形）の耳飾りをはじめとした装飾品、その他各種の副葬品があわせて展示されているが、藤ノ木古墳など日本の出土品との類似性ととともに、ここでの技術的水準の高さをあらためて知らされる。



国立公州博物館



国立公州博物館前庭



石莊里遺跡

### 石莊里（ソクチャンニ）遺跡

韓国で旧石器文化の存在が初めて明らかにされた研究史上に有名な石莊里遺跡は、忠清南道公州郡長岐面石莊里に所在し、錦江（クムガン）に南面した段丘上（比高七―一五メートル）にある。將軍峰から連なる背後の丘陵端部は砂利採取によって大きく抉られ、また遺跡がのる段丘面も畑によって削られ、遺跡の周辺はかなり旧状を失っているが、かつての発掘区の一部は現在もなお残されており、断面の観察や周辺での石器の表採も可能な状況にある。遺跡は、一九六四年に発見され、同じ年の一一―一二月に最初の調査が行われた。その後一九七二年までの各年、そして一九七四年、一九九〇年、一九九二年と、あわせて一二次におよぶ発掘調査が延世大学の孫宝基 Sohn Pow-key 教授らによって実施された。調査は、下流に位置する北の第一地点と上流に位置する南の第二地点とでおこなわれ、第一地点では、住居址とともに細石刃核、彫器、搔器など後期旧石器時代の石器が検出され、第二地点では、最下層からチョッパー、チョッピングツールなど前期旧石器

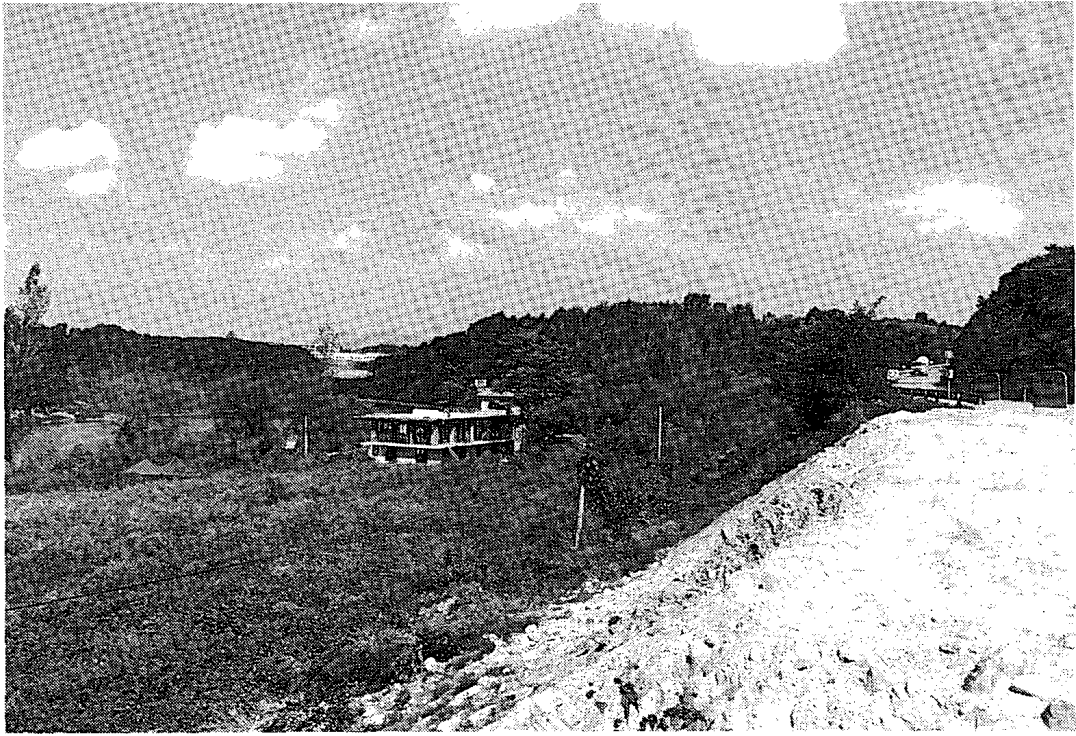
時代にあたる石器が出土したと言われている。文化層は大きくは三群、すなわち一〜六文化層は前期、七〜九文化層は中期、一〇〜一二文化層は後期にあたり、上層に向かうにつれていいいな調整加工が認められ、前期旧石器から後期旧石器への変遷過程がうかがえるという。また住居址が検出された上層では、石材の利用に変化がみられるという。石材に使われた黒曜石は、白頭山、Kum-song からきていることが、ガンマー線分光分析で確認され、また遺跡から出土した木炭による放射性炭素年代が、五〇、二七〇YBP、三〇、六九〇YBP、二〇、八三〇YBPと示されている。なお、前期旧石器については、人工品でないとする考えが支配的である。

#### 全谷里（チョンゴクリ）遺跡

遺跡は、ソウルの北およそ五〇km、北緯三八度線を越えた軍事境界線近く、全谷里の郊外の京畿道漣川郡全谷里に所在する。漢難江（ハンタンガン）を見おろす河岸段丘上に立地し、標高およそ六〇mを数える。遺跡は、一九七八年四月に発見され、一九七九年から一九八三年にかけて集中的に調査が実施されたが、その後もソウル大学や東北アジア研究所（李漢龍研究員他）によって調査が続けられている。何よりも、東アジア初のアシュールタイプ両面石器、ハンドアックスが出土した遺跡として広く知られることになったが、それらに伴ってチョップング・ツール、クリーヴァー、ピック、スクレーパー、彫器、ハンマーストーン、剥片などが多数発掘されている。遺跡の基盤となる玄武岩の層が、K-Ar法でおよそ三〇万年前と産出され、更新世中期に遡るとみなされているが、それよりは新しい包含層の年代について、およそ三〇万年前、五万〜一二万五千年前、三万五千〜一〇万年前、四万〜六万年前とみなす見解などに別れ、今日なお結論をみていない。技術的に大きな変化はないと考えられている遺



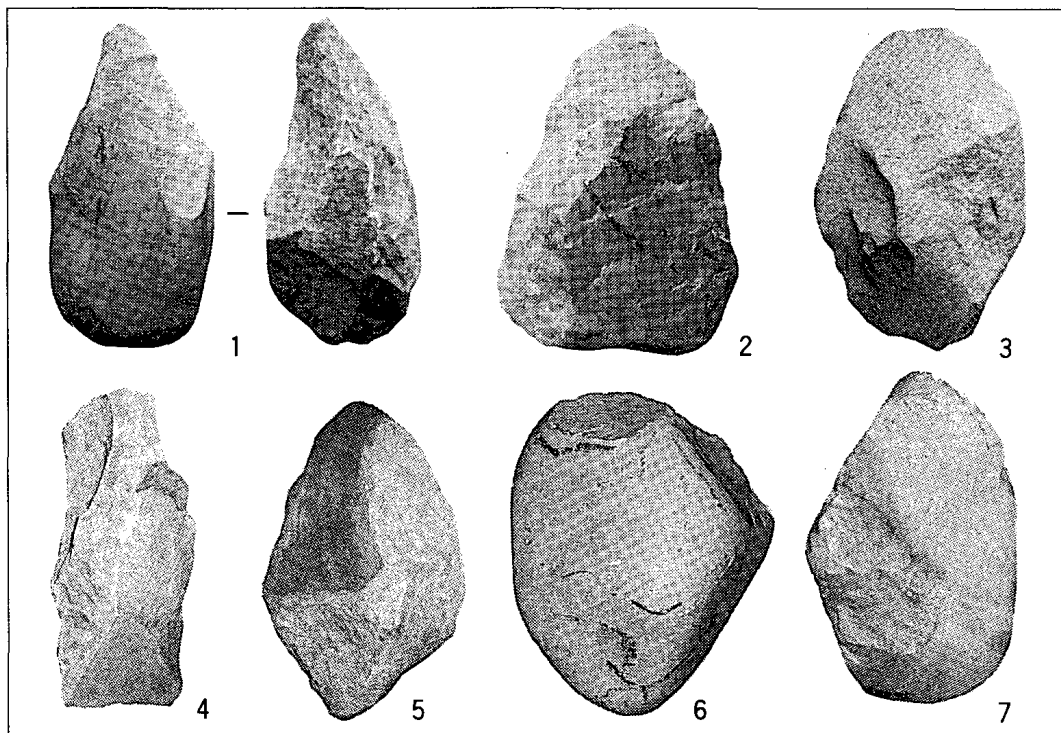
韓国・丹陽の国際シンポジウムに参加して



全谷里遺跡



全谷里遺跡 (数字は地点を示す)



全谷里遺跡出土の石器（縮尺不同 1:17.7cm、2:13.8cm、3:17.1cm、4:15.4cm、5:15.7cm）

物群は、上下二つのグループに大別される。石材は、石英と珪岩が主体を占める。

ところで、遺跡を訪ねた日、折しもサッカーワールドカップアジア予選、韓国対日本戦が行われるこの日、案内してくれた若い李漢龍研究員らは、ソウルに戻る所要時間や日曜日の交通事情などを考慮し、早めに巡見を切り上げる必要があると考えていたようである。しかし、ぜひ遺跡の断面を観察したいという強い要請に折れて、あわただしくわれわれを遺跡の中に案内することとなった。そこでのちょっとした、しかし興味深いやりとりをここで紹介しておきたい。しばらく観察していた中国科学院の黄慰文先生が、突然、「この全谷里遺跡の年代がみなさんが考えるより古い更新世中期であることを証明しましょう」と言い出し、道路のきわにほんのわずかに残っていた崖を指さしながら説明を始めたのである。要するに、褐色土の中にさらに暗く赤い土が混ざっている土層が、南東アジアに共通するラテライト化した土層であり、この土層が年代の決め手になるというものであった。もちろん



国立中央博物館

ん、研究員らがただちにその見解を受け入れる様子はなく、年代論争はさらに持ち越されることとなった。

なお余談になるが、全谷里遺跡のやや小高い場所に小さな資料館が設けられており、遺跡出土の大形のチョッパや、石英製の小形の剥片石器など多数の資料とともに、中国やアフリカの資料が展示されている。また、その庭の一角には、韓国考古学の父、金元龍 (Won-Yong Kim) 博士の記念碑が建っている。

#### 国立中央博物館

一九八六年以来、ソウル特別市中央、旧朝鮮総督府の建物に置かれていた国立中央博物館は、一九九六年一二月になって社会教育会館が増・改築され、現在の場所に移設された。かつての朝鮮総督府の建物はすでに取り除かれているが、そのおよそ西側に位置する。収蔵遺物は一二万点余を数え、そのうちおよそ四五〇〇点が地下階・一階・二階の一八の展示室に分かれて常設展示されているという。

全谷里遺跡や垂揚介遺跡など韓国を代表する旧石器からはじまる先史室、太王陵や双楹塚から出土した遺物が並ぶ高句麗室、武寧陵や夢村土城、扶蘇山城などからの出土遺物が並ぶ百濟室、皇南大塚や金鈴塚から出土した金冠などが並ぶ三国時代の新羅室（以上二階）、象嵌青磁など高麗時代の代表的な磁器が並ぶ高麗磁器室、朝鮮時代の陶磁器の主流を成す白磁が並ぶ朝鮮白磁室、朝鮮時代の景福宮や旧朝鮮総督府の建物がある当時の景福宮とその周辺の様子が原型模型などで示される景福宮室（一階）、金銅弥勒菩薩半跏像など三国時代から朝鮮時代に至る仏教彫刻品が並ぶ仏教彫刻室（地下階）、その他興味つきない考古・歴史資料、美術品、民俗資料などが近代的に整備されたケースに収められた展示室が続く。

大型バスがひっきりなしにやってきて、館内は溢れんばかりの見学者で賑わっている。国立博物館が消え失せようという日本の昨今の事情とは大違いで、われわれ日本人が久しく忘れていた韓国ならではの光景である。ここでの様々な活動が、韓国の伝統文化遺産の保存や文化創造に中枢的な役割を果たしているという解説も、すなおに肯くことができた。

### 東北アジアにおけるムステイエ文化とそれ以後

今回のシンポジウムで、韓国の旧石器はもとより、東北アジアの旧石器文化に関する多くの新知見を得ることができた。それぞれの研究について論究したいが、紙数の関係で、ここでは東北アジアにおける中期旧石器から後期旧石器への展開に絞り若干の展望を明らかにし、まとめたい。

これまで筆者は、シベリアのゴルノ・アルタイを中心とした地域に典型的ムステイエ文化が存在すること、そし

てその確かな広がりが見エセイ河流域まで追跡できることを明らかにしてきた(木村一九九五・一九九八a・b他)。それは、「V」字状交差剝離と山形状に作られた打面調整(シャポー・ド・ジャンダルム)をもつルヴァロワ三角形剝片(「ルヴァロワ尖頭器」)やルヴァロワ石核を有し、斜軸のコンヴァージョンタイプのスクレブロをはじめとした各種のスクレブロなどが組み合わさる特徴的な石器群である。加えて、その石器伝統が、アングラ河流域を越えて極東にまで広がる可能性があること、そしてそれらが日本の中期旧石器とも関連するであろうことを予察した。

その後シベリア・アルタイ地域では、デニソワ洞穴やカーミンナヤ洞穴、ウスチ・カラコル遺跡、チュメチン四遺跡などで新たな資料が追加されているし、エニセイ河流域でもクルタク遺跡群など新たな地点と資料の追加がはかられている。およそ北緯五五度以南のシベリア・極東にかけて帯状に広がったと予想されるムステイエ文化、あるいはムステリアン伝統の様相は、よりいっそう確かなものになりつつある。

近年、モンゴル・ロシア・アメリカ共同調査隊によるゴビ・アルタイを中心としたモンゴルでの調査が続けられている。長年にわたってシベリアのA・P・オクラドニコフやA・P・デレヴァンコ、V・T・ペトリンとモンゴルのツェベーン・ドルジらによって進められてきたロシア・モンゴル共同調査は、ソ連邦崩壊後のひと時両国関係の冷却化とともに中断を余儀なくされたこともあるが、新たにアメリカを加えて本格的共同調査が再開され、中期旧石器研究の面で大きな成果があげられている。それらの成果も隣接するシベリア・アルタイ同様に逐一報告されており、同じようなムステイエ文化の広がりがモンゴルにまで及ぶことが明らかになっている(Okladnikov 1981、Derevianko et al. 1985, 1990, 1998、加藤一九八八、白石一九九五)。まとまった資料が得られている多層遺跡の

モイルティン・アム遺跡を好例として、ウエンチⅠ遺跡、バルラギン・ゴルⅠ遺跡、同Ⅳ遺跡、オクロ・ノールⅠ遺跡、同Ⅱ遺跡、オルホンⅠ遺跡、イフ・ハイラント遺跡などが相当する。石器の組み合わせなど、シベリアの典型的ムステイエに共通する。しかし、作りが概して小型である。石材に由来する差異なのか、年代や系統の差を示しているのか、なかでも小型のそれはモンゴルにおいて発達した独特な技術伝統とみなしうるのかどうか、新たな課題も生まれている。確かな証拠を持ち合わせてはいないが、典型的ムステイエ文化に属しながらも、小型のグループを異系統のものともみならず仮説は、魅力ある仮説のひとつではあるが、そもそも拳大ほどの円礫をルヴァロワ石核に用いるのが一般的であり、石材に起因した典型的ムステイエ文化の地域的様相とみなすのが妥当と思われる。

最近、やはり小型の「ルヴァロワ尖頭器」をもつ良好な一群が、ゴビ・アルタイのバヤン・オンドル (Bayan Ondor suum) 地方の州都シャイン・ジンスト (Shine Jist) の北方三〇<sup>キ</sup>にあるチヘン洞穴 (Chicken Agui) で発見されている。遺跡は、北緯四四度四六分二二秒、東経九九度四分八秒に位置する。洞穴は、露出した列状構造の石灰岩の頂き付近に立地し、谷底からの比高四〇―五〇<sup>ミ</sup>を数える。一九九六年に最初の調査が行われ、試掘溝や第二地点の下層から打面調整をもつ小型「ルヴァロワ尖頭器」や「ルヴァロワ石核」などが発掘されている (Derevanko et al. 1996) (図九)。詳細な考察は、今後の正式報告を待たねばならないが、年代、あるいはその系統などの研究に確かな見通しが与えられる可能性があるかと期待している。

さて先述したとおり、今回のシンポジウムでは、IVPP研究所の黄慰文博士による盤県大洞の発掘および出土資料に関する報告が行われ、極めて重要な課題が提起された。報告を聞いたフランスの旧石器に詳しい韓国研究者たちは、それら出土資料が「ルヴァロワ尖頭器」・「ルヴァロワ石核」とみなして良いという積極的な評価を下し

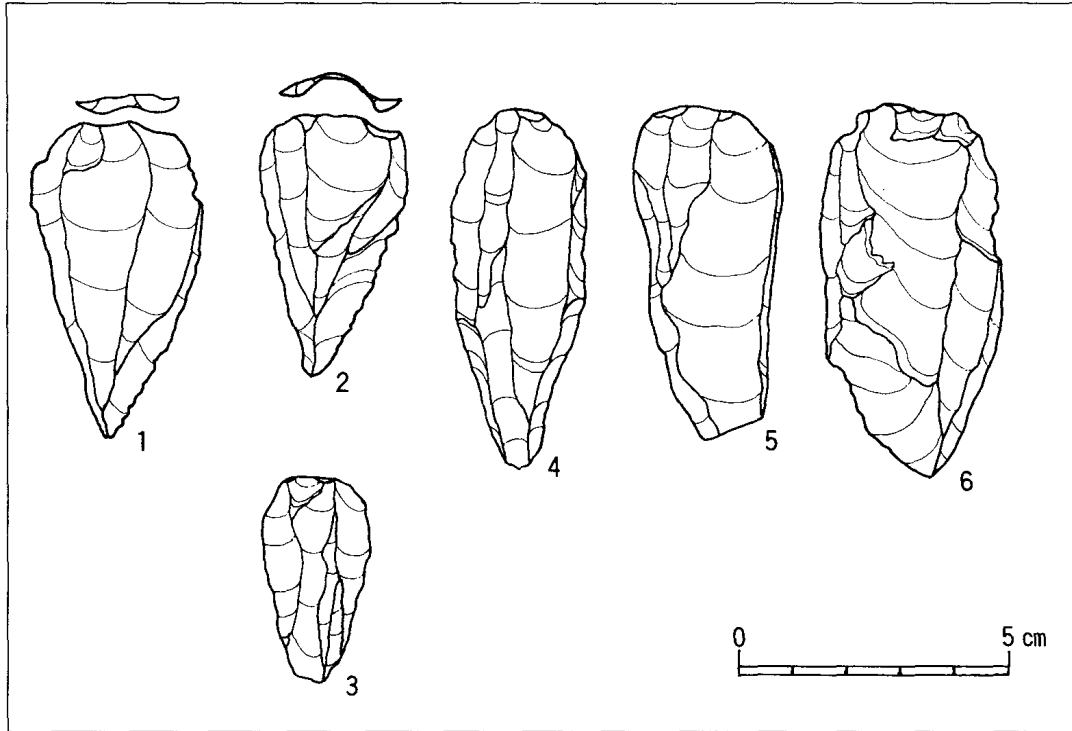


図9 モンゴル・チヘン洞穴出土のルヴァロワ三角形剝片（尖頭器）・同石刃

たのに対し、報告者の黄慰文博士が、「典型的なものとは認められず、研究所内部でも評価が分かれていること、何よりもなお類例を待つ必要があることなどをあげ」、それら資料に関して「ルヴァロワ様石核」、「ルヴァロワ様剝片」、「ルヴァロワ様尖頭器」と表現し、慎重な姿勢に終始した。

ムステイリアン伝統が中国の南部にまで広がっていたのかどうか、また、仮に中国南部への広がりがあったとして、北のシベリア、モンゴル方面から及んだものか、あるいは西のインド方面から直接南回りルートで及んだものかなど、盤県大洞の資料の評価如何で大きな課題が惹起される。しかも、日本列島における「中期旧石器文化」の実態が徐々に明らかになりつつある昨今、日本のそれが周辺地域とどのような系統関係になるかなどの議論についても、少なからずの影響を与えるに違いない。

これまで中国では、北京市房山県周口店第一五地点、山西省襄汾県丁村遺跡、河北許家窯遺跡、陝西省塔水河「Tashuihe」遺跡、寧夏回族自治区靈武県水洞溝遺跡などの資料中に、ル

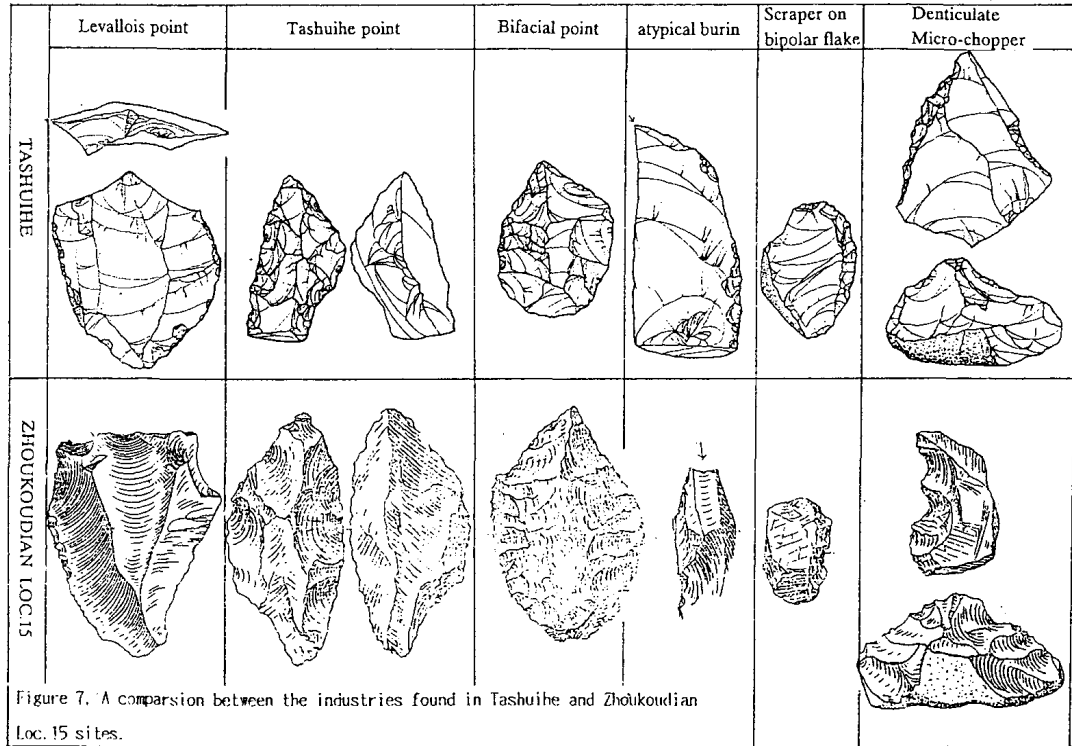


図10 塔水河及び周口店第15地点の石器群 (Tung et chen 1990)

ヴァロワ技法が存在することが指摘されてきた。古くは水洞溝遺跡の資料に対してであるが、これについては後に触れる。加藤晋平、鄧聰は、周口店第一五地点の資料中に調整打面をもった「ルヴァロワ尖頭器(三角形剥片)」が存在するに注目した(加藤一九八八、鄧一九八九)。しかも鄧Tungらは、陝西省塔水河Tashuihe遺跡の石器群を紹介する中で、そこにみられる「Levallois point ルヴァロワ尖頭器(三角形剥片)」、「Tashuihe point 塔水河型片面加工尖頭器」、「Bifacial point 片面加工尖頭器」、「atypical burin」、「Scraper on bipolar flake」、「Denticulate Micro-chopper」という組合せが、周口店第一五地点の石器群とよく一致しており(図一〇)、それらがムステリアン伝統の技術的特性を示す中期旧石器時代の石器群であるとみなした(Tung et Chen 1990)。これらは、いずれも中国北部の石器群である。

さらに、登によれば、盤県大洞と同じ貴州高原にあって日本でもよく知られている黔西県観音洞下層の資料中に「斜軸尖頭器」、「剥片尖頭器」、「ノッチ」、「石錐」、「ベック」、



「ナイフ」、「ハンド・アックス」が含まれており、とりわけ「斜軸尖頭器」はルヴァロワ技法に関連した、いわゆるムステリアン要素に類似するものであるとみなし、ルヴァロワ技法の影響が中国南部にまで及んでいたという（鄧一九八七・一九八九、「Tung et Chen 1990」）。やはり加藤も、観音洞下層の石器群について、鄧が「斜軸尖頭器」とした石器はいずれも各種のスクレーパー類（石器群全体のおよそ五八%にあたる八三七点）であり、多調整面打面を含む調整打面から剝離された剝片も極めて少ないことから、華南地区では独特の石器群であるとしつつも、「ムステリアンの特徴が認められる」という同様な理解を明らかにしている（加藤一九八八）。

また、佐川正敏は、ルヴァロワ技法が北緯五〇度付近、特にアルタイ山脈や外モンゴル西部に分布するが、「外モンゴルに接する中国西北地方や華北地方では見つかっていない」し、「周口店や山西省には一見ルヴァロワ尖頭器風の石片はあるが、点数が少なく、石核もないので、公認されていない」（佐川一九九五a）としながらも、同様に、周口店第一五地点などにみられる「斜軸尖頭器」が「ムステイエ文化との接触や影響を示す」ものとみなしている（佐川一九九五b）。つまり、こと中国北部の石器群については、評価がおよそ一致している。

しかし一方、佐川は、それらの広がりや「北緯三五度以南の華南地方」にはまったく及んでいないことをあわせ考察しており（佐川一九九五b）、中国南部については意見が分かれている。

これまで筆者は、シベリア・アルタイやモンゴルにみられる「ルヴァロワ三角形剝片（尖頭器）」剝離技法中の「V」字状交差剝離と細部調整をもつて山形打面を作り出す典型的ムステイエ文化の技術的特徴が、バイカル湖周辺や極東へ至る過程で簡略化の方向に向かうらしいことを明らかにしてきたが、中国北部での類似資料は、その一連の動きを反映したものであり、シベリア・アルタイからの影響が中国北部にまで及んでいたとみて間違いないと考える。

一方、中国南部にまで及んでいたかどうかについては、類例が少なく即断できる状況にはないが、現状からすると、盤県大洞や観音洞など中国南部の資料を過大評価できる状況になく、これまでの理解を大きく修正する必要はなさそうに思われる。

ところで、シバリア・アルタイでの典型的ムステイエ文化の石器群が、比較的スムーズに後期旧石器文化の石器群に移行すること、しかもそれらの移行が、ある中心地からの波及、あるいは干渉によるものではなく、世界の多元的な動向の中であらわれた、換言するとシベリア独自の動きとして進行した現象であることを明らかにしてきた（木村一九九七他）。あらためて述べるまでもないが、その結論は、それぞれの石器群に見られる石器の組合せとそこにみられる製作技術の解析を通して導き出されたものであり、カラ・ボム遺跡の分析がとりわけ重要な位置を占めていた。

今回、カラ・ボム遺跡の石器群に関連する興味ある研究報告が、ノヴォシビルスクのA・P・デレヴァンコとV・N・ゼーニンより行われた（報告者はゼーニン）。報告の主旨は、これまで筆者がおよそ一括できるとみなしてきた石器群が、八つのステージに分けられるというものである。これまでも、Dereviankoなど一部研究者が予想していたことではあるが、初めて層位的に石器群が区分された。しかも、実年代も示され、かなりの長期間の変遷を含む石器群であることも明らかにされた。仮にルヴァロワ技法に示される「中期旧石器的石器群」と石刃技法に示される「後期旧石器的石器群」が截然と分離されるとなると、これまで明らかにしてきた筆者の見解が誤りであることとなり、大いに関心をもって報告を聞いた。

図一一一―一四は、報告とともに示された器種別変遷図の一部である。図で明らかかなように、カラ・ボム遺跡での

韓国・丹陽の国際シンポジウムに参加して



図11 カラ・ボム遺跡における石核の変遷 (Derevianko et Zenin 1997)

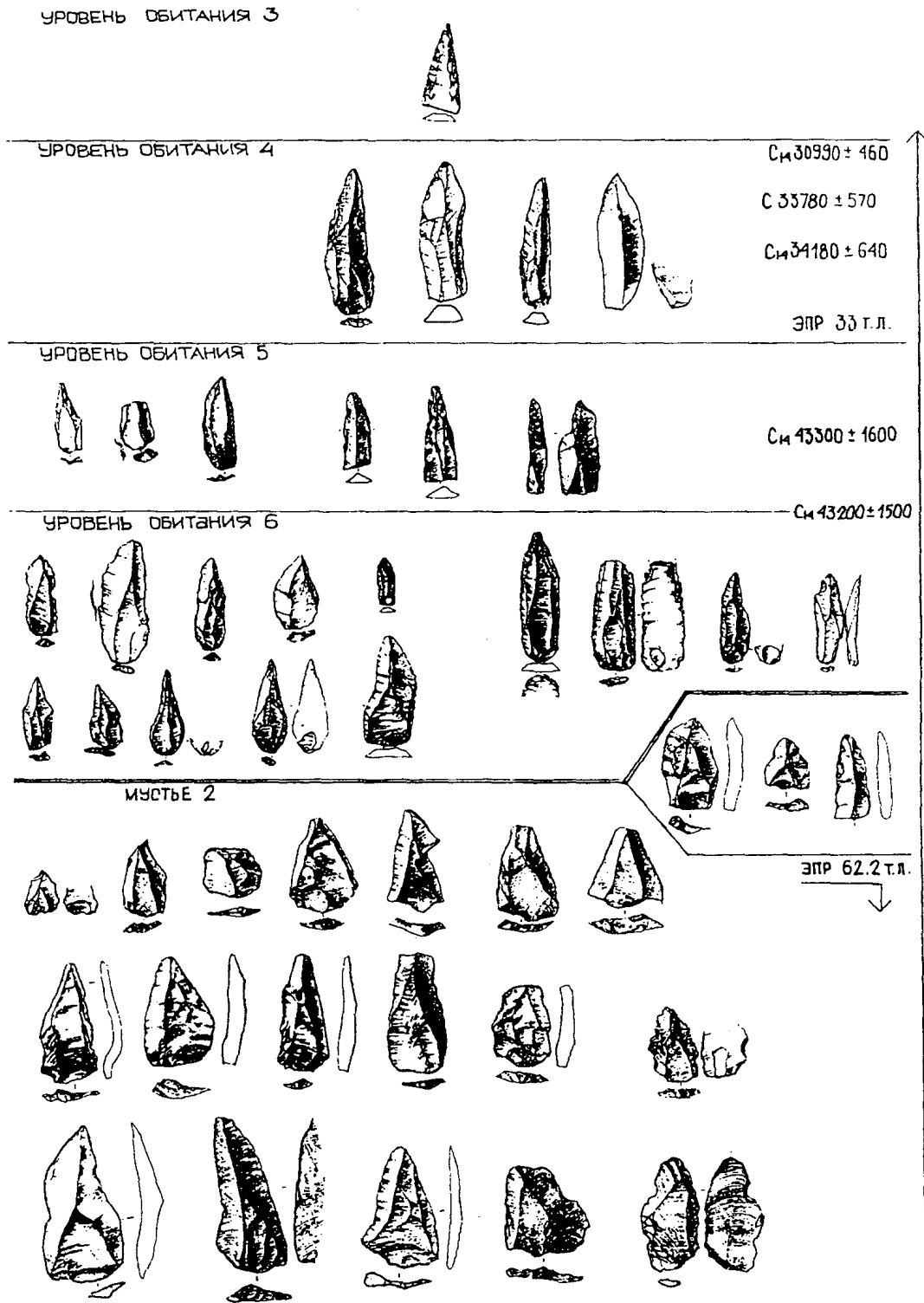


図12 カラ・ボム遺跡における三角形剝片(「尖頭器」)の変遷(Derevianko et Zenin 1997)

韓国・丹陽の国際シンポジウムに参加して

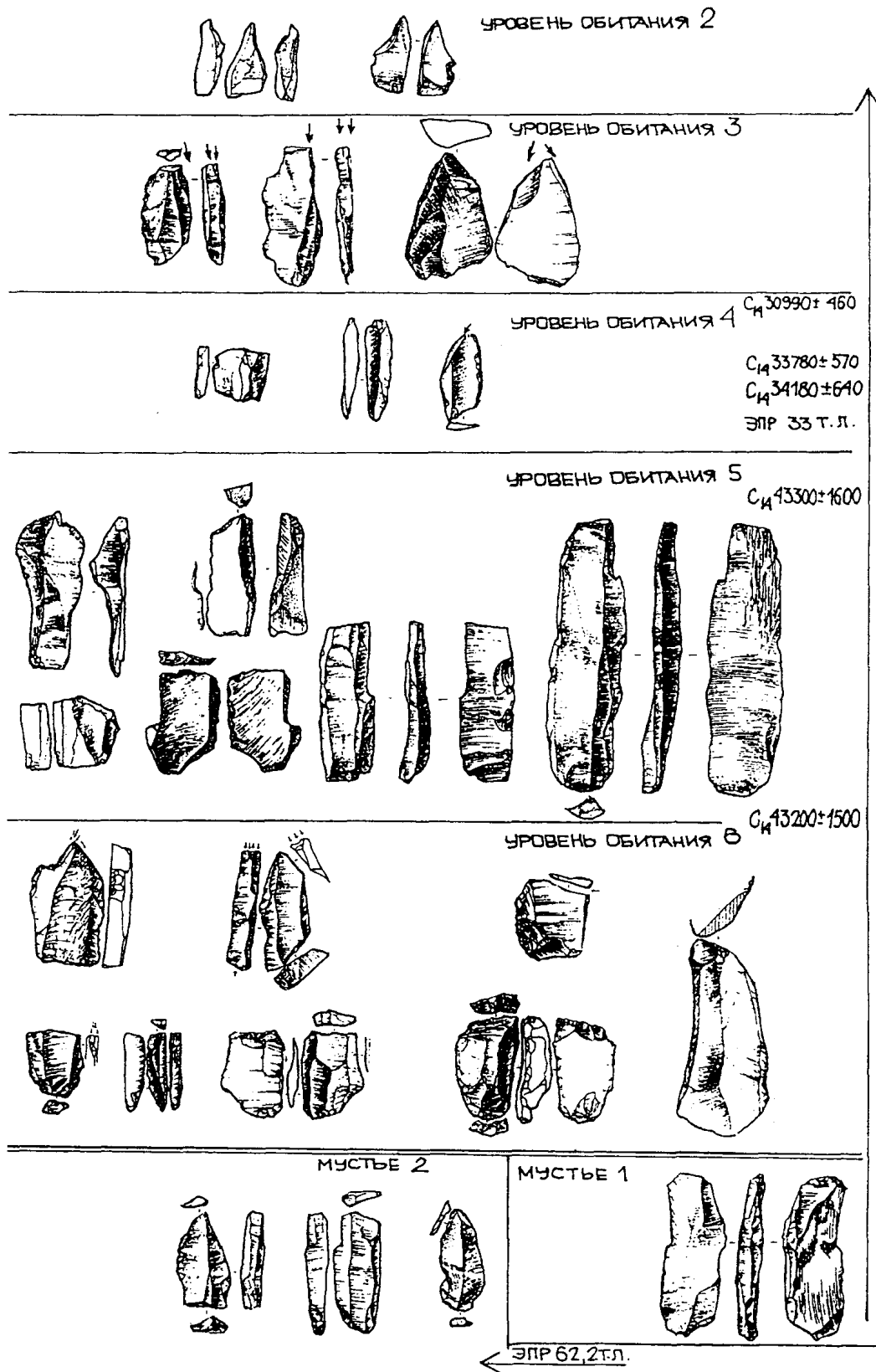


図13 カラ・ボム遺跡における彫器の変遷 (Derevianko et Zenin 1997)

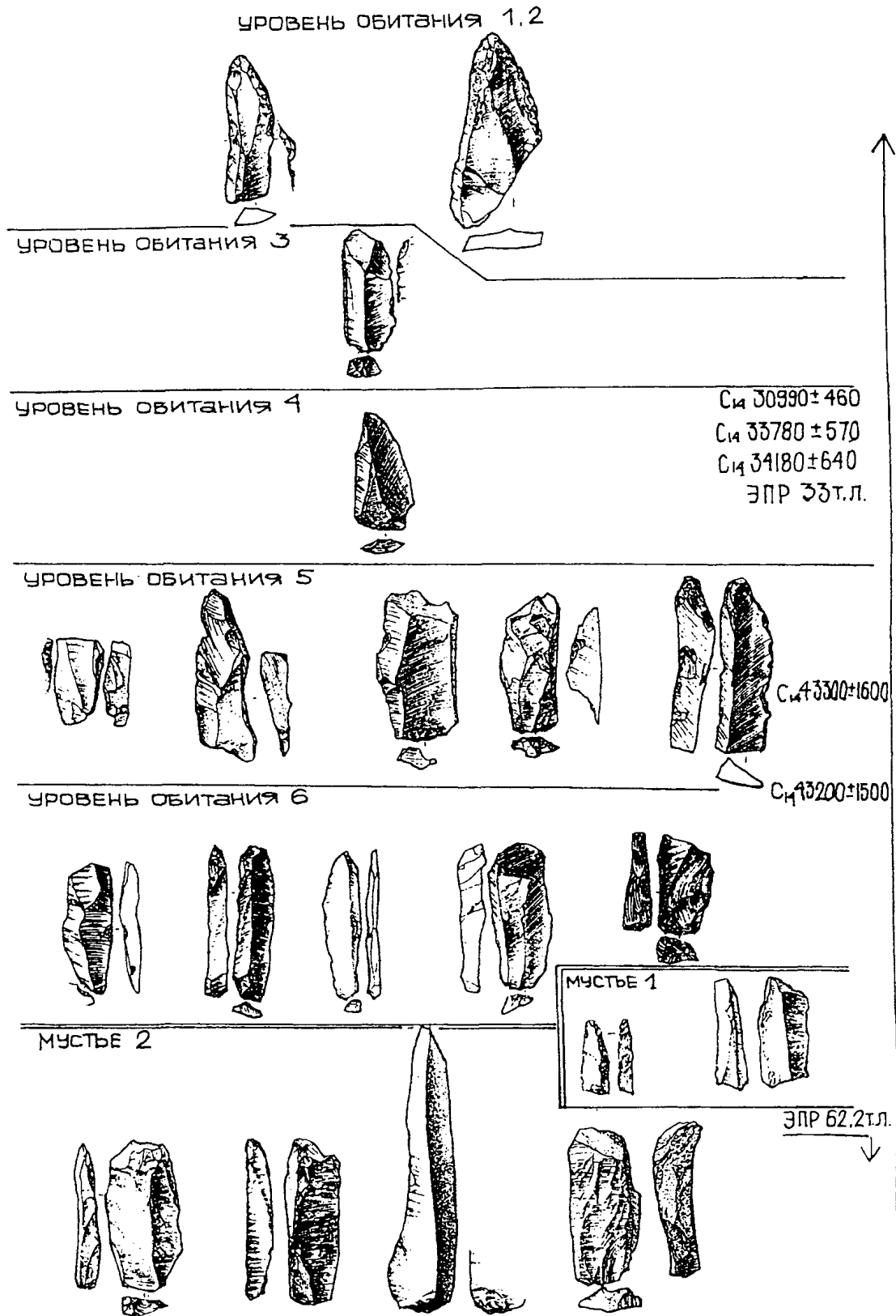


図14 カラ・ボム遺跡における石刃の変遷 (Derevianko et Zenin 1997)

最古段階として中期旧石器時代の典型的ムステイエ文化のステージを設定したことが、もつとも重要で、新しい知見である。そのムステイエ段階は、EPR法による年代、六万二千二〇〇年YBPを境に二つのステージに分けられている。ただし、その終末年代は明示されていない。後続する後期旧石器段階は、六つのステージに区分されており、放射性炭素年代によると、第五ステージと第六ステージの境界が四万三千二〇〇±一千五〇〇YBP、第五ステージが四万三千三〇〇±一千六〇〇YBP、第四ステージが三万四千一八〇YBP、三万三千七八〇±五七〇YBP、第四ステージと第三ステージの境界が三万九九〇±四六〇YBPという年代が示されている。一見してわかるように、ムステイエ段階は、山形の打面調整をもつ典型的な「ルヴァロワ三角形剥片（尖頭器）」が主体をなし、それが剥がされたルヴァロワ石核を伴う。その他、若干の彫器、搔器、また図示しなかったがスクレブロ、鋸歯縁石器などが共伴する。本格的な石刃は、ここでは少ない。一方、縦長の大型石刃を利用した彫器や搔器などがまとまってあらわれるのが、後期旧石器段階の第五ステージになってであることがわかる。層位的区分が確かである。このような変遷がそもその姿であるとすれば、筆者が一括して扱った資料のうち、典型的な「ルヴァロワ三角形剥片（尖頭器）」と、本格的な石刃とはおよそ区別せねばならず、訂正を要する。その結果、カラボム遺跡の石器群は、典型的な「ルヴァロワ三角形剥片（尖頭器）」を特徴とする石器群と、本格的な石刃を有する「石刃石器群」<sup>2</sup>とに大きく（正しくは「ゆるやかに」）二分されることになる。そしてこれまで、三万五千年前頃と考えていたシベリアにおける後期旧石器時代のはじまりは、少なくとも四万五千年前頃まで遡るらしいことが判明し、関連してシベリア・アルタイにおける典型的ムステイエ文化についても全体的に古く引き上げる必要性が生じている。

しかし、カラ・ボム遺跡の石器群がおよそ二分されること、あるいは実年代がより古くなることについての修正

は適当としても、筆者が「ルヴァアロワ三角形剥片（尖頭器）」剝離技法から石刃技法がスムーズに成立するとみた基本的関係、そしてその動向がシベリアの中で出現・展開したとみる仮説については、新たな研究の上に立って大きく修正する必要はなさそうである。むしろ、カラ・ボム遺跡の石器群が層位的に細分され、これまでの見通しの正しさがあらためて検証された結果になっている。図で明らかのように、ムステイエ段階にあっても後期旧石器段階に連なる石刃が数多く含まれているし、また後期旧石器段階に至っても中期旧石器以来の伝統である山形の打面調整をもつ「ルヴァアロワ三角形剥片（尖頭器）」や同じような打面調整をもつ石刃が大量に含まれている。総じて石刃が細身になる傾向はあるものの、技法の変遷が漸次進行したとみなすことができるのである。いずれにせよ、カラ・ボム遺跡にみられる「ルヴァアロワ三角形剥片（尖頭器）」の製作技法と石刃の製作技法とが極めて類似したものであり、近親の関係にあることがあらためて理解される。仮に、概念的に両技法を区別したとしても、石器群を合理的に、またある時間で截然と区分することはおよそ不可能である。

中期旧石器段階から後期旧石器段階への過渡的段階を含むカラ・ボム遺跡の石器群に対比できる遺跡として、イルクーツク市郊外にあるアレシボフスキー記念遺跡をあげることができる（木村一九九七）が、特に中国北部の水洞溝遺跡が注目される。水洞溝遺跡の研究史と石器群にかかわっては多くの研究が知られているが、山中一郎と稲田孝司の研究に詳しい（山中一九八六、稲田一九九四）。一九二三年のティアル・シャルダンによる発掘で得られた石器群位置づけについて、特に稲田は、「中期旧石器的な円盤状石核技法と後期旧石器的な石刃技法が共存」し、「非常に発達したムステイエ文化からオーリニャック文化が生まれてくる中途段階か、その二つの要素が結合したもの」というH・ブレイユのこれまでの研究（Brewil, H. 1928）をさらに発展させ、石器素材製作技法、剥片剝離



技法の解析から中期旧石器時代の典型的な「ルヴァロワ石刃技法基礎」とも異なり、しかも後期旧石器時代の石刃技法とも異なる独自の性格をおびた技法が認められることを明らかにし、その技法を「水洞溝型素材製作技法（水洞溝技法）」と仮称した。すなわち、「円盤状・半割礫等の原形に打面と側縁の連続した調整を施した石核から、作業面縁取り石刃ついで石刃を剝離する技法」であるとし、これまで「円盤状石核と石刃石核はムスチエ文化要素と後期旧石器文化要素をそれぞれ代表するものとみなされ、ときには時期を異にした二つの石器群の混在の可能性さえ考慮されたのであるが、両者は二つの文化に属する別々の要素ではなく、一つの石器群の素材製作技法における二つの要素ないし二つの側面と理解すべきであろう」と説く。要するにルヴァロワ技法の伝統の中に生まれ、非ルヴァロワ石刃技法へ一歩踏み出したものと評価し、結果として筆者がかつて分析したシベリアのマリタ遺跡の石器群、特に「剝片剝離技法A」の特徴に類似し、両者が同じ文化伝統と年代を示すものと予察した（稲田一九九四）。

一方、松藤和人は、戦後に発掘された資料には、ムスチエ文化的な要素がほとんどなく、水洞溝遺跡の石器群は比較的単純な石刃石器群であるとした（松藤一九九一）。少なくとも、ムスチエ的な石器群とは区別され、両石器群が共存することはないという見解である（松藤一九九一・岡村・松藤他一九九八）。

すでに触れたように、これまでのところ中国では、典型的な「ルヴァロワ三角形剝片（尖頭器）」をもつ典型的ムスチエ文化の石器群は今のところ明らかにされておらず、若干の「ルヴァロワ三角形剝片（尖頭器）」、あるいは「斜軸尖頭器」の存在によってその影響が理解されている程度である。当然ながら、過渡的段階を含むカラ・ボム遺跡の石器群と直接対比できる確かな資料はない。仮に対比できたとしても、ルヴァロワ技法の影響の低いかなり異なった石器群であろうことが想像される。こうした中で、稲田の言う「水洞溝技法」は、石刃技法の初期的

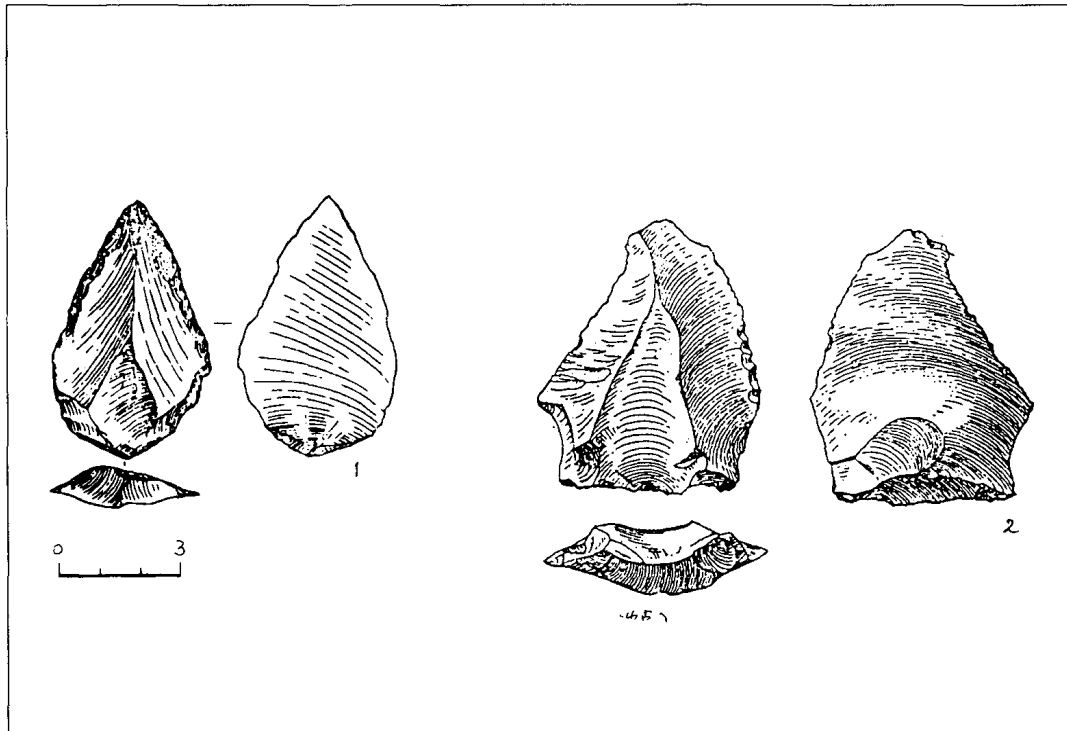


図15 中国北部の「ルヴァロワ三角形剥片（尖頭器）」（1.水洞溝、2.周口店才15地点）

様相を示している。しかも、ここでは「ルヴァロワ・ポイントを組織的に製作する技法は確認できていない」（稲田一九九四）が、「ルヴァロワ三角形剥片（尖頭器）」（図一五）に對比可能な資料が含まれている。実際の出土状況がどうであったのか、松藤の批判は今後なお検討されていかねばならないが、むしろムステイエ文化的な要素と後期旧石器文化の要素とが混然と存在する分け難き関係こそが実在する状況と認識し、稲田に示された水洞溝遺跡の石器群が、シベリアのカラ・ボム石器群における過渡的段階のあるステージ、あるいはそれに後続するシベリアのヴァルヴァリナ・ガラー遺跡の石器群（木村一九九七）に對比できるもつとも有力な石器群であると言えよう。

要するに、中期旧石器時代から後期旧石器時代にかけて、中国北部でも、シベリアの影響をいくらか受けた類似の石器群が併存していたと考えており、今後いつその資料の蓄積があるものと期待している。もちろん、機会があればぜひ水洞溝遺跡の資料を直接に観察し、シベリアの資料などと比較

してみたいと願っている。

末尾ながら、今回のシンポジウムに参加できたのは、李隆助忠北大学教授の特別な計らいがあったからである。小生にとって初めての韓国訪問ではあったが、学んだ成果は予想をはるかに超えて大きく、ここで紹介できた事柄もほんの一端に過ぎない。あらためて述べるまでもないが、シンポジウムで報告した研究者たち、そしてこれからの韓国旧石器研究を支える数多くの研究者たち、若き学生たち、彼らを支える郷土史家や地元の住民たちとの新しい出会いと心暖まる交流は、かけがえのない財産となった。そのうえ、すばらしい自然に恵まれた丹陽で思いがけずに安息の日々をいただいた。夏休みにいただいたすばらしい贈り物のような気分である。あらためて李教授に感謝申し上げたい。また、韓国滞在中、上記人々と心残りなく交流ができたのは、小生のために通訳をしていた明治大学大学院博士課程在籍の金正培君のおかげである。労苦をいとわず、小生の考えを十二分に伝えていただいた。頭が下がる思いである。また、シンポジウムでの討論の様子を『報告書』やテープから再現するよう努めたが、その翻訳の一部を札幌大学文化学部学生の林漢春君に手を煩わした。記して感謝申し上げます。(完)

#### 引用・参考文献

- 稲田孝司一九九四 「水洞溝技法とルヴァロワ技法―東アジア石刃技法形成の一過程」  
『考古学研究』第四一卷第一号
- 岡村道雄・松藤和人・木村英明・辻誠一郎・馬場悠男一九九八 『旧石器時代の考古学』(シンポジウム『日本の考古学』一 学生社)
- 加藤晋平一九八八 『日本人はどこから来たか―東アジアの旧石器』(岩波新書)
- 木村英明一九九五 「寒冷地への適応戦略」『モンゴロイドの地球四―極北の旅人』(東京大学出版会)
- 木村英明一九九八a 『シベリアの旧石器文化』(北海道大学図書刊行会)

韓国・丹陽の国際シンポジウムに参加して

- 木村英明一九九八b 「マンモスハンティング」 『科学』 第六八巻第四号
- 佐川正敏一九九五a 「東アジアの先史モンゴロイド文化」 (『モンゴロイドの地球』三. 東京大学出版会)
- 佐川正敏一九九五b 「アジアからシベリアへの人類の広がり」 (『モンゴロイドの地球』四. 東京大学出版会)
- 白石典之一九九五 「モンゴル東部のムステリアン石器群」 『考古学雑誌』 第八〇巻第三号
- 鄧聰一九八七 「中国旧石器の新動向」 『考古学ジャーナル』 二八三号、
- 鄧聰一九八九 「中国観音洞遺跡の早期石刃技術資料」 『才四紀研究』 二八
- 松藤和人一九九一 「フランスの旧石器時代遺跡を訪ねて」 『旧石器考古学』 四三
- 山中一郎一九八六 「中国オールドス地方水洞溝遺跡出土の石器群」 『旧石器考古学』 三三
- Dervjanko A.P., Oksen D., Tsevendorzh D., Petrin V.T., Zenin A.N., Krivoshapkin A.I., Nikolaev S.V., Myljnikov V.P., Rivs R.U., Guchinsuren B. et Tserendagva Ja. 1998, *Arheologicheskie issledovanija Rossijsko-Mongoljsko-Amerikanskoi ekspeditsii v Mongolii v 1996 godu.*
- Dervjanko A.P., Dorzh D., Vasiljevskij R.S., Larichev V.E. et Petrin V.T. 1985 *Arheologicheskie issledovanija v Mongolii. Novosivirsk*
- Dervjanko A.P. et Zenin A.P. 1997, The Mousterian to Upper Paleolithic transition through the example of cave and open air sites of the Altai. *Suynggae and Neighbours.*
- Derevjanko A.P., Dorzh D., Vasiljevskij R.S., Larichev V.E., Petrin V.T., Devjatkin E.V. et Malaeva E.M. 1990, *Paleolit i Neolit Mongoljsko-go Altaja.*
- 斐文中他一九五八 『山西省襄汾県丁村旧石器時代遺址発掘報告』
- Huang Weinwen et Hou Yamei 1997, Archaeological evidence for the First Human Colonisation of East Asia. *Indo-Pacific Association Bulletin. Vol.16,*
- 李炎賢他一九八六 『観音洞』
- Okladnikov A.P. 1981, *Paleolit Tsentralnoj Azii.*

SOHN, Pow key 孫性基 1993 *Sokchang-ni Prehistoric Site*

Tang Chung et Chen Zhe Ying, 1990, Observations on the Paleolithic Industries of the Tashuibie

Rockshelter Site, Shanxi Province, North China. *International Symposium,*

*Chromostratigraphy of the Paleolithic in North, Central, East Asia and America.*

韓国・丹陽の国際シンポジウムに参加して